

「内」の視点と時制現象：日英語対照研究*

和田 尚 明

1. はじめに

本稿の目的は、2つある。1つ目の目的は、日英語の時制構造の相違ならびに時制解釈のメカニズムを、Wada (2001) で提案された時制理論に基づいて体系的に示すことである。2つ目の目的は、事例研究として、日英語の各時制形式がもつ時制構造が、「内」の視点が関わる言語環境のもつ特性の影響を受けた結果、当該環境における日英語の時制現象の差異と見かけ上の類似性を引き起こしている、という点を論証することである。

具体的には、まず第1の目的に関して、英語の定形動詞は絶対時制形式であるのに対し、英語の非定形動詞と日本語の述語は相対時制形式であることを確認した後で、それぞれの時制形式が生起する言語環境のもつ特性の影響を受けてどのように解釈されていくのか、その時制解釈のメカニズムを概観する。

次に第2の目的に関して、「内」の視点が関わる言語環境において時制解釈がどのようになされるのかを詳しく見ていくことになる。本稿で言う「内」とは、話者（概念化者）から見た記述・描写の対象となる現象や場面の中（内側）という意味であり、「内」の視点とはその現象（場面）内に入り込んでいる視点のことである。したがって、「内」の視点が関わる言語環境とは、直示的中心である「発話状況」（話者の「いま」と「ここ」）から話者（概念化者）が直接現象を見る（捉える）場合（これが「外」の視点から見る場合に当たる）と違って、記述・描写される現象（場面）内の人物（たまたま話者と同一指示になる場合もある）の視点もしくは話者がその現象（場面）内にシフトさせた自らの視点を通して当該現象を見る（捉える）ことを要求する言語環境のことを言う。また、本稿で言う「視点」とは、「ものごとを見る（捉える）時の中心となる視座」である点に注意されたい。本稿では、「内」の視点が関わる言語環境として知覚動詞補部、ト書き連鎖、主要部内在型関係節を取り上げることにする。

2. 時制形式と時制構造レベル・時制解釈レベル

本節ではまず、Wada (2001) において英語の時制現象の包括的・体系的説明を目指して提案された時制理論が、日英語の時制現象を統一的な観点から説明できるモデルにもなることを確かめる。より具体的に言えば、人称・数・法と一体化した時制形態素（屈折辞）であるか否かという観点から、日本語の定形述語は英語の定形動詞ではなく非定形動詞と同じ時制構造をもつ形式であると主張し、両言語間の時制現象の相違点や見かけ上の類似点の基底にはこの時制構造上の相違があるということを論証することになる。

2.1. 時制構造レベルと時制解釈レベル

はじめに、この時制モデルの特徴の1つとして、「時制構造レベル (Tense Structure Level)」と「時制解釈レベル (Tense Interpretation Level)」という2つの時制の場に関するレベルを区別している点を確認しておく必要がある。時制構造レベルは任意の時制形式そのものもつ抽象的（スキーマティック）な意味情報を表すレベルで、ここで表される時間情報は論理概念的な時間関係である。一方の時制解釈レベルは、時制構造レベルにおける抽象的な時間情報が時制の場以外の文法の場に属する意味的・語用論的・統語的要因ならびに文脈の影響を受けて、実際に使用される際にどのような解釈値を表すことになるのか、その解釈のプロセスを表すレベルである。本稿では、この区別が日本語の時制解釈においても説明力をもつことを見ていくことになる。

2.2. 絶対時制形式・相対時制形式の時制構造

2.2.1. 絶対時制部門・相対時制部門

次に、われわれの時制モデルの第2の特徴として、時制構造を構成するのに2種類の時制部門を必要としている点を確認しておこう。Wada (2001) では、英語の定形動詞は絶対時制形式に、英語の非定形動詞は相対時制形式に分類されている。絶対時制形式は絶対時制部門（A-部門）と相対時制部門（R-部門）から成る2層の時制構造をもつのに対し、相対時制形式は相対時制部門から成る単層の時制構造をもつ。

- (1) a. 絶対時制形式：絶対時制部門 + 相対時制部門
- b. 相対時制形式：相対時制部門

英語ではなぜ、定形動詞が絶対時制形式に、非定形動詞が相対時制形式に分類されるのかというと、絶対時制部門と相対時制部門がそれぞれ以下のように定義されるからである。

- (2) a. 絶対時制部門：動詞（述語）に付属する人称・数・法と一体化した時制形態素（屈折辞）が関与する時制部門。
 b. 相対時制部門：動詞（述語）に付属する人称・数・法と一体化した時制形態素（屈折辞）以外の時間に関する要素が関与する時制部門。

この定義により、人称・数・法と一体化しない時制形態素（屈折辞）や動詞（述語）語幹は相対時制部門に属する時間情報に貢献する要素ということになる。ここで「絶対」と「相対」のネーミングの由来であるが、前者は文法化した直示範疇が関与しているからであり、後者はそうでないからである。本稿では、便宜上、絶対時制部門に関わる時制形態素（屈折辞）をA-形態素、相対時制部門に関わる時制形態素（屈折辞）をR-形態素と呼ぶことにする。英語の定形動詞は（その融合がかなり進んでいるとはいえ）人称・数・法に応じて変化する現在時制屈折辞（-sで代表させる）か過去時制屈折辞（-edで代表させる）をもつので、これらの時制屈折辞はA-形態素となる。したがって、英語の定形動詞は絶対時制部門をもつと言える。¹ 一方の英語の非定形動詞であるが、非定形形態素（過去分詞マーカ-の-en・現在分詞マーカ-の-ing・原形不定詞マーカ-の ϕ ・to-不定詞マーカ-のto・動名詞マーカ-の-ing）は何らかの形で時間関係を表すのに貢献しているという点を考慮して時制形態素と捉えることは可能である（cf. 中右 1994）。しかしながら、人称・数・法という文法的概念とは連動していない。それゆえ、これらの時制形態素は定義上R-形態素となり、英語の非定形動詞には絶対時制部門に組み込まれる要素が存在しないことになる。以上の観察から、英語では定形動詞が絶対時制形式、非定形動詞が相対時制形式になるのである。

ここでの論点を、具体例で確認してみよう。(4a, b) はそれぞれ、(3a, b) の時制構造を示す。

- (3) a. plays / burned
 b. playing / burnt
 (4) a. [R play] + [A -s] / [R burn] + [A -ed]

b. [R play + -ing] + [A]/[R burn + -en] + [A]

A 付き括弧内の要素は絶対時制部門に、R 付き括弧内の要素は相対時制部門に属することを示す。ここでは、(4b)の過去分詞形 *burnt* の時制構造において、因数分解された要素 *t* が過去分詞マーカである *-en* で表されている点に注意されたい。絶対時制形式の場合、時制屈折辞は A-形態素であり絶対時制部門に組み込まれるので、相対時制部門には動詞の語幹部分のみが組み込まれる。一方、相対時制形式の場合、時制形態素は R-形態素なので、動詞の語幹部分とともに相対時制部門に組み込まれる。²

この観点に立って日本語の動詞（述語）の時制構造を捉えた場合、日本語では定形であろうと非定形であろうと、述語はすべて相対時制形式となる (cf. 和田 2001, 2002)。ここで、本稿は「定形」という概念に関して、Maas (2004) の捉え方を採用している点に注意されたい。すなわち、人称・数・法・時制に関して1つでも屈折変化する動詞（述語）は形態的に定形、「発話状況」に結びつける役割を果たす動詞（述語）は意味的に定形と考え、少なくともどちらか一方の定形性を満たす動詞（述語）を定形動詞（述語）とする。したがって、日本語の述語で時制屈折辞をもち、かつ、文末位置に現れて「発話状況」に結びつけるタイプのものは、定義上、定形述語となる。しかしながら、この種の屈折辞は人称・数・法と一体化したタイプの時制屈折辞ではないため、R-形態素に分類される。その結果、日本語の定形述語は相対時制形式となるのである。

この主張は、(5) から実証される。

(5) {私／彼／彼ら} は、琴の音色が {好きだ／好きだった}。

(5) において、いわゆる現在形・「好きだ」は、主語が3人称単数の場合でさえも他の場合と同じ時制屈折辞（この場合、*-da*）をもつ。このことから分かるように、日本語の述語には人称・数による活用変化はない。また、日本語には英語のような西欧言語に見られる文法範疇として確立した法（直説法や仮定法など）も存在しない。³ したがって、日本語の定形述語の時制屈折辞は定義上 R-形態素ということになり、絶対時制部門に組み込まれる要素が存在しないので、日本語の定形述語は相対時制形式に分類されるのである。

非定形述語の場合は、原則として、そもそも人称・数・法といった概念に応じて屈折することはない。日本語の非定形述語にもこの原則が当てはまること

は、(6) から明らかである。

(6) 「私／彼／彼ら」は筑波山に登って、大声で叫んだ。

「テ」形・「登って」は法はもとより人称・数に応じて屈折しないので、非定形述語である。それゆえ、非定形形態素-teは絶対時制部門には入らない。しかしながら、何らかの時間関係は表すので、R-形態素ということになる。

具体例で確認してみよう。(7a)は定形述語の、(7b)は非定形述語の例である。

- (7) a. 座る (suwa-ru) / 泣いた (nai-ta)
 b. 座って (suwa-t-te) / 泣き・ながら (nak-i・nagara)

定形の時制屈折辞である-ruや-taも、非定形の時制形態素-teや-i(連用形の活用語尾)も、定義上R-形態素であることが分かったので、(7)は(8)のように因数分解される(時制構造に直接関わらない要素は省いてある)。

- (8) a. [R suwa + -ru] + [A] / [R nai + -ta] + [A]
 b. [R suwa + -te] + [A] / [R nak + -i] + [A]

以上の観察から、われわれの枠組みでは、日本語の述語は定形であれ非定形であれ相対時制形式ということが確認できた。⁴

なお、日本語ではいわゆる現在形は、動詞の場合は-ru(例：座る(suwa-ru))もしくは-u(例：泣く(nak-u))、形容詞の場合は-i(例：白い(shiro-i))、形容動詞または名詞+判定詞の場合は-da(例：静かだ(shizuka-da)、判事だ(hanji-da))で終わる。一方、いわゆる過去形の場合は、一部-da(例：叫んだ(saken-da))で終わるものを除いて基本的には-taで終わる。本稿では、便宜上、いわゆる現在形の方を「ル」形、いわゆる過去形の方を「タ」形と呼ぶことにする。

ここまでの議論をまとめると、以下のようなになる。

英語の定形動詞(現在形・過去形)	絶対時制形式
英語の非定形動詞	相対時制形式
日本語の述語(定形・非定形)	相対時制形式

図1：日英語の定形・非定形と時制形式のタイプとの対応関係

ここで特筆すべきは、日本語の定形述語は時制構造の観点からは英語の定形動詞とは異なり、英語の非定形動詞と同じであるという点である。以降、本稿ではこの相違点に焦点を絞って議論を進めるため、日本語の非定形述語の時制構造はあまり扱わない。

2.2.2. 絶対時制形式の時制構造

それでは、絶対時制部門と相対時制部門の中身を詳しく見ていくことにしよう。まずは絶対時制形式の時制構造からである。絶対時制部門の定義として、(9)をご覧いただきたい。

- (9) 絶対時制部門：話者の時制視点との時間的位置関係でその値が決まる、「文法的な時間帯」である「時間区域」が表す時間情報が占める部門。

話者の時制視点 (Temporal Viewpoint of the Speaker) とは「時制形式を選択・決定するための中心となる視座」のことである。⁵ 前節で見たように、絶対時制部門に関与する時制屈折辞 (A-形態素) は英語では現在時制屈折辞-s と過去時制屈折辞-ed の2種類なので、英語には現在時制屈折辞の表す「現在時区域」と過去時制屈折辞の表す「過去時区域」という2種類の時間区域が存在することになる。⁶ 両者の表す時間情報は、(10)に示されるとおりである。

- (10) a. 現在時区域：話者の時制視点を含む文法的な時間帯
 b. 過去時区域：話者の時制視点を含まない(に先行する)文法的な時間帯

では、絶対時制形式における相対時制部門はどのような役割を果たす部門なのであろうか。この問いに答えるためには、まずは相対時制部門自体の定義を見ておく必要がある。(11)をご覧いただきたい。

- (11) 相対時制部門：出来事時と他の時間概念との時間関係を表す時間情報が占める部門。

出来事時 (Event Time) とは「動詞 (述語) によって表される状況 (出来事・行為・状態) の問題とされている (考慮の対象となっている) 部分 (局相) が当てはまっている (生じる) 時点・時間幅」のことで、動詞語幹 (動詞の本体部分) によって表される時間情報である。

このことを念頭において、絶対時制形式の場合、相対時制部門がどのような時間情報を表すのかを見てみよう。絶対時制形式の場合、時制形態素は A-形態素なので、絶対時制部門に組み込まれる。したがって、相対時制部門には動詞語幹部分しか組み込まれない。換言すれば、相対時制部門には、出来事時がどのような時間関係を表すのかを明示する要素 (すなわち、R-形態素のような要素) が存在しない。それゆえ、相対時制部門内において、出来事時は他の時間概念との時間関係を積極的に表すことができない。したがって、その名前が示すように、相対時制部門のもつ時間情報は絶対時制部門のもつ時間情報に依存的となり、出来事時 (R-部門内の要素) は時間区域 (A-部門内の要素) の中に従属するように、すなわち、時間区域のカヴァーする範囲内に収まるように位置づけられる (この依存関係は、後ほど言語事実によって証明される)。

これまでの議論を基に英語の絶対時制形式の時制構造を図式化すると、以下のようになる。

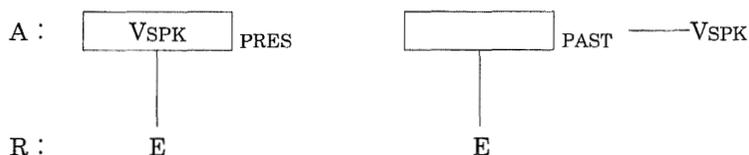


図 2：(i) 現在形 (絶対時制形式) (ii) 過去形 (絶対時制形式)

絶対時制部門に関する時間情報は A ラインに、相対時制部門に関する時間情報は R ラインに示される。PRES 付きの長方形が「現在時区域」、PAST 付きの長方形が「過去時区域」、E が出来事時、VSPK が話者の時制視点を表す。また、「X—Y」は「X が Y に時間的に先行する」ことを、X と Y が縦線もしくはコンマで結ばれるときは「X と Y が同時である」ことを表す (本稿で言

う「同時関係」には、「包含関係」や「(一部)重複関係」も含まれる)。したがって、例えば、現在形 plays の時制構造は「現在時区域の中に play の出来事時が生じる (当てはまる)」ということを表し、過去形 played の時制構造は「過去時区域の中に play の表す出来事時が生じる (当てはまる)」ということを表す。

2.2.3. 相対時制形式の時制構造

次に、相対時制形式の時制構造に移ろう。相対時制形式には絶対時制部門が存在しないので、その時制構造内には「時間区域」はなく、「時制視点」も存在しない。このことは、換言すれば、相対時制形式が表す時間情報に貢献する要素はすべて相対時制部門に組み込まれるということである。したがって、相対時制形式がもつ時制形態素 (R-形態素) は、何らかの時間関係を明示する要素であることを考慮すると、相対時制部門において出来事時と他の時間概念との時間関係を明示的に示す要素と考えられる (cf. (11))。すなわち、当該 R-形態素の種類によって出来事時が他の時間概念から見てどのような位置 (時間) 関係にあるのかが決まってくるのである。この場合、「他の時間概念」は出来事時の位置を測るための中心点・視座の役割を果たすので、以後「基準時 (Time of Orientation)」と呼ぶことにする。ただし、時制構造レベルでは、基準時が時間軸上のどの時点に同定されるのかが決まっておらず、時制解釈レベルにおいて、当該時制形式が実際に使用 (解釈) される段階で初めてその時点が同定されるので、時制構造レベルでは「潜在的基準時 (Potential Time of Orientation)」と呼ぶことにする。

以上をまとめると、相対時制形式の時制構造は、動詞 (述語) 語幹が表す出来事時と R-形態素が表す出来事時の潜在的基準時に対する時間関係から成り立つことになる。基準時に対する任意の時点の時間関係は、論理的に「先行関係」・「同時関係」・「後続関係」の3つが可能なので、相対時制形式の時制構造は図3に示される3種類が可能である。

R: (i) E——(O) (ii) E, (O) (iii) (O)——E

図3：相対時制形式の3パターン (i)先行関係 (ii)同時関係 (iii)後続関係

この図で、括弧に入ったOは潜在的基準時を表す。R-形態素は、その種類に

応じて、図3の時間関係のうち最低でもどれか1つを表す（R-形態素の種類によっては、2つないし3つを表せるものもある）。

では、具体的にどのR-形態素がどのような時間関係を表すのかを見ていくことにする。まず、英語の相対時制形式として、現在分詞・過去分詞・原形不定詞の時制構造を見てみる。⁷ これら3つの非定形動詞の形態素（R-形態素）が表す時制構造は、それぞれ(12)に示されるとおりである。

- (12) a. 現在分詞のR-形態素-ing：出来事時が潜在的基準時に対して同時関係にある。
 b. 過去分詞のR-形態素-en：出来事時が潜在的基準時に対して先行関係にある。
 c. 原形不定詞のR-形態素 ϕ ：出来事時と潜在的基準時の時間関係は無指定である。

ちなみに、時間関係が無指定ということは3つの時間関係すべてを潜在的に表しうるといことである。また、原形不定詞のもつR-形態素は、ゼロ形態素（接辞）であると仮定している。

ここで注意されたいのは、(12)の時間情報はあくまでも時制構造レベルのものであって、時制解釈レベルではそれぞれの時制構造と矛盾しない範囲での解釈強制（coercion）が行われたり、アスペクト値（aspectual value）が前面に出てきたりすることもあるという点である（「解釈強制」の定義については、3.1.4節で改めて述べることにする）。したがって、これら3種類の非定形動詞の時制構造が(12)で表されているものであることの論証は、基本的にはそう仮定することによって、以下で扱う特定言語環境においてなぜそれぞれの非定形動詞の時制解釈がそうなっているのかを説明できることを示すことによって行える。⁸

ただし、図3の3つの時間関係をすべて表せる時制構造をもつ原形不定詞に関しては、本稿で扱うことになる時間関係が同時に限定される関係上、その他の可能性については見ておく必要がある。(13)をご覧いただきたい。

- (13) a. John will come tomorrow. (後続性)
 b. What! Me know the answers! (先行性)

本稿が依拠する Wada (2001) の時制理論は、助動詞も独自の出来事時を表すことができるという立場をとっている (cf. Janssen 1996, 中村 2001, 中右 1994)。したがって、(13a) においては、原形不定詞 *come* はこの言語環境 (定形動詞の補部) では基準時と同定される法助動詞 *will* の出来事時に対する後続関係を表す (注 6 を参照)。このことは、共起する時の副詞 *tomorrow* からも明らかである。問題は (13b) の原形不定詞 *know* である。Duffley (1992: 95) によれば、(13b) は例えば、"How could you have expected me to know the answers to those questions which you asked me last week?" という解釈を受けることが可能である。したがって、このような解釈においては、(13b) の原形不定詞は発話時に対する先行関係を表すことになる。'

次に、相対時制形式の日本語の例として、「ル」形と「タ」形の時制構造を見てみよう。これら 2 つの定形動詞の R-形態素が表す時制構造は、それぞれ (14) に示されるとおりである。

- (14) a. 「ル」形の R-形態素-*ru*: 出来事時が潜在的基準時に対して非先行関係にある。
 b. 「タ」形の R-形態素-*ta*: 出来事時が潜在的基準時に対して先行関係にある。

ここで、非先行関係は同時関係と後続関係の両方を表せることに注意されたい。

この場合も、先ほどの英語の非定形動詞の場合と同じく、(14) の時間情報はあくまでも時制構造レベルのものであって、時制解釈レベルではそれぞれの時制構造と矛盾しない範囲での解釈強制が行われたり、その結果、アスペクト値を表したりすることもある。それゆえ、(14) の時制構造の妥当性の証明についても、そう仮定することでもって、本稿で扱う特定言語環境における「ル」形・「タ」形の時制解釈がなぜそうなっているのかを説明できることで行えることになる。

以上、絶対時制形式と相対時制形式の時制構造を見てきた。次節では、本節で取り上げた各時制形式が時制解釈レベルでどのような解釈値へと至るのか、そのプロセスについて見ていくことにする。

2.3. 時制解釈のメカニズム

2.3.1. 絶対時制形式の時制解釈

2.3.1.1. 話者の時制視点と意識の融合

まず、絶対時制形式の時制解釈から始める。デフォルト（無標）の場合、時制解釈レベルの第1段階で、絶対時制形式（現在形か過去形か）を選択する際の基準点が発話時と同定されるが、そのプロセスは以下のとおりである。絶対時制形式の時制構造に話者の時制視点が含まれていることはすでに見たとおりであるが、まずこの時制視点が原理（15）に則って話者の意識と融合（結合）する。¹⁰

(15) 同一話者に帰属する時制視点と意識は融合（結合）する。

ここで言う「話者の意識」は、あらゆる精神活動・認知活動を行う中核部分のことであり、通例、発話（思考）している時や認知活動をしている時においてのみ活性化すると考えられるので、時制解釈を行う時は常に発話時に当てはまっていることになる。¹¹ また、「視点」は、通例、話者の意識からは分離可能で、意識・認識する対象となりうる客体化可能な概念である。例えば、家の2階から外を見ている人が遠くに見える山の頂上に自らの視点があるかのように想像する場合、当人の意識そのものは家の中にあるが視点は山頂に移動していて、それを意識・認識していると言える。したがって、視点の一種である時制視点も客体化でき、話者の意識から切り離されて時制構造内に存在するという主張は正当化される。しかしながら一方で、同一人物に帰属する視点と意識が同一の時空間に存在する場合のほうがデフォルト（無標）であると主張することに異論はないものと思われる。以上の観察から、任意の時制形式の使用責任者（すなわち、話者）に帰属する時制視点が、時制解釈の際に自らの意識と融合（結合）する、すなわち、同一時空間を占める場合がデフォルトであると言える。したがって、原理（15）は正当化され、話者の意識は常に発話時に当てはまるので、デフォルトの場合は「絶対時制形式を選択する際の基準点は発話時」ということになるのである。

ここまでの論点を、例証してみよう。(16) をご覧いただきたい。

- (16) a. John loved Mary.
b. Nancy loves Tom.

まず過去形の例（16a）であるが、話者の時制視点（VSPK）が発話時（S）にある話者の意識（CSPK）と結びついた結果、その時間図式は図4に示されるとおりになる。（本稿の図式では、右向き矢印は時間軸を表し、その先が未来を表す。）

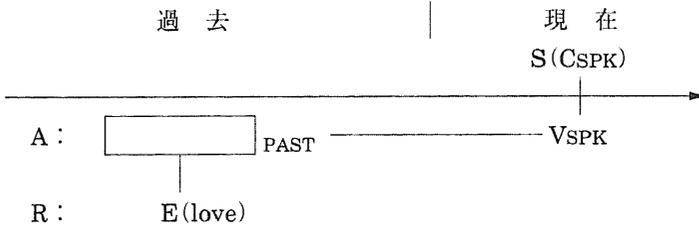


図4：英語の過去形の時間図式

原理（15）により、時制視点が発話時にある話者の意識と結びつくのであるが、その結果、過去時区域（PAST 付きの長方形）は過去時に対応する。それゆえ、動詞 love の出来事時（E）は、過去時に当てはまることになる。したがって、通例、過去時に生じた（当てはまっていた）状況を表すのに過去形が選択されるのである。

現在形の例（16b）も同様のプロセスを経た結果、その時間図式は図5のように示される。

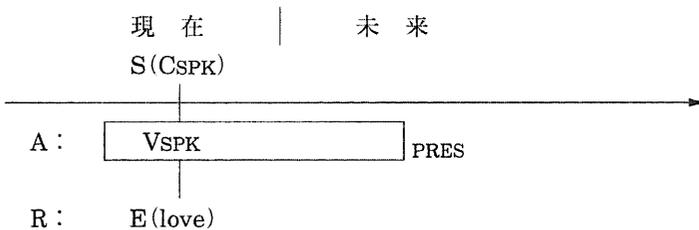


図5：英語の現在形の時間図式

ただし、現在形の場合は、原理（15）によって話者の時制視点と意識が融合した結果、現在時区域（PRES 付きの長方形）は現在時と未来時の2つの時間領

域に対応することになる。

デフォルトの場合、過去時区域が過去時に対応するのに対し、現在時区域が現在時と未来時をカバーできるという主張は、以下のパラダイムによって実証される。

- (17) a. John is ill now. / *John is ill yesterday.
 b. Mary was ill yesterday./*Mary was ill now.
 c. After Yoko (*arrived / arrives) tomorrow, I will leave for my home town.

(17a) では、現在形 *is* は過去時を指す時間副詞 *yesterday* とは共起できないが、現在時を指す *now* とは共起できることから、現在時区域は現在時をカバーすることが分かる（歴史的現在の解釈の可能性は除いてある）。一方 (17b) では、過去形 *was* は過去時を指す *yesterday* とは共起できるが、現在時を指す *now* とは共起できないことから、過去時区域は過去時をカバーすることが分かる（過去形小説の地の文の解釈の可能性は除いてある）。さらに (17c) からは、現在形は未来時を指す *tomorrow* とは共起できても過去形は出来ないことから、現在時区域は未来時もカバーできることが分かる。

(17) のパラダイムは、同時に、2.2.2節で見た「絶対時制形式の場合、相対時制部門に属する時間情報である出来事時は絶対時制部門に属する時間情報である時間区域に従属する形で結びつく」という依存関係をも例証している。この依存関係は「出来事時は当該時間区域内に生じなければならない」ことを示しているので、例えば、(17a) の *John is ill yesterday.* が非文なのは、*yesterday* によって指示される出来事時が過去時に当てはまらなければならないのに、現在形 *is* の表す現在時区域がカバーする時間領域と矛盾するためと説明できるからである。

英語の絶対時制形式（現在形と過去形）の場合、原理 (15) の発動がデフォルト（無標）であるということは、言語事実によっても確かめられる。(18) と (19) をご覧いただきたい（下線部が問題となる形式である）。

- (18) a. Mary was sick.
 b. John said that Mary was sick.
 c. Mary left home when John came back.

- (19) a. Tom is sick.
 b. Nancy says that Tom is sick.
 c. Grace leaves home when (ever) Tom comes back.

(a) 文では独立節，(b) 文では間接話法補部，(c) 文では時間節の中に，問題となる過去形と現在形が生じている。しかしながら，そういった言語環境の違いを超えて，これらの時制形式はすべて発話時を基準点として選択されている。(18) の過去形の場合だと，すべて発話時から見た過去に生じた（当てはまっていた）状況に言及するので過去形が使われているし，(19) の現在形の場合も同様に，すべて発話時から見た現在に生じている（当てはまっている）状況に言及するので現在形が使われているからである。

この節では，デフォルトの場合の絶対時制形式を選択するための基準点を決めるメカニズムを見てきた。その際，時制構造内における時制視点の存在が発話時基準の時制形式選択へとつながる要因であることが確認できた。このことは，われわれが提案した英語の絶対時制形式の時制構造の妥当性を示していると言える。

2.3.1.2. 状況視点と基準時

では，相対時制部門が表す時間情報である出来事時の時間軸上における位置を測るための基準時はどのように定まっていくのであろうか。絶対時制形式の場合，出来事時は時間区域内に生じることはすでに見たが，出来事時がどの時点を基準時としてその位置を測るかについては，これまでのところ触れてこなかった。したがって本節では，絶対時制形式が表す出来事時の時間軸上の位置を測るための基準時を同定するメカニズムを見ていく。なお，本稿では原則として，出来事時を測るための基点を「基準時」と呼ぶことにし，時制形式選択のための基点のほうを「基準点」と呼ぶことにする。

まず，基準時同定のメカニズムにも，何らかの視点に関与していることが考えられる。これは，「任意の実体の位置を測る際には必ず何がしかの視点を中心として測る」という人間の普遍的な認知能力からの必然的帰結であるからである。¹² 出来事時とは「動詞（述語）によって表される状況（出来事・行為・状態）の問題とされている部分（局相）が当てはまっている（生じる）時点・時間幅」であったので，ここで関係してくる視点は動詞（述語）の表す状況を時間軸に沿って眺める（捉える）ためのものということになる。¹³ この視点は，

時制形式選択のための視点である時制視点とは異なるので、本稿では「状況視点 (Viewpoint of Situation-Description)」と呼んで区別することにする。

したがって、この状況視点がおかれる時点が出来事時を測るための基準時ということになる。この状況視点も時制形式の選択をするのと同一の話者に帰属する概念であるので、他に妨げる要因がない場合は話者の意識と同一の時空間を占めることになる。その意味で、デフォルト（無標）の場合、状況視点は時制視点と同様発話時にあり、発話時が基準時となる (cf. Smith&Erbaugh 2005)。しかしながら一方で、文法体系（時制構造）内に組み込まれた時制視点と違って、状況視点は任意の状況を描写しようとする話者によってある程度主観的にコントロールできるタイプのものである。ただし、このことは、話者による状況視点の選択が全く自由であると言っているのではない。デフォルトの場合の基準時は発話時であるが、当該時制形式が生起する言語環境の特性によって発話時以外の時点が基準時になるのを許したり、強要したりすることもあるということである。なお、本稿で言う「言語環境」という用語は、独立節・補文節などの統語環境や会話体・小説の地の文などの談話タイプなどを含めたカヴァータームとして用いることにする。

以上を念頭において、基準時同定のメカニズムを具体例で見てみよう。ここでは、絶対時制形式の例として過去形を取り上げることにする。(20) をご覧いただきたい。

- (20) a. Mary was sick.
 b. John said that Mary was sick.

(20) は会話体のテキストと仮定する。はじめに、(20a) の was を取り上げる。まず、原理 (15) に従って話者の時制視点と意識が融合（結合）した結果、発話時が時制形式選択の基準点となる。問題となっている「メアリーが病気である」状況が当てはまっているのは発話時から見た過去時なので、ここでは過去形が使われることになる。次に、この was の出来事時を測るための基準時の同定に移る。(20a) は会話体・独立節なので、この言語環境の特性上、発話時以外に基準時の候補となる時点がない。したがって、この言語環境は基準時同定のデフォルトの場合に当たり、状況視点 (VSD) は発話時におかれる。その結果、発話時が was の出来事時を測るための基準時となる。以上から、基準時から見た当該出来事時の時間値（時制解釈値）は「先行性」ということに

なる。このメカニズムを図式化すると、下の図6のようになる。また、この時間値の中にはアスペクト値も関与してくる。ここではwasが状態動詞であることから、アスペクト値は「未完了」ということになる。

一方の(20b)であるが、主節の過去形saidの出来事時を測る基準時同定のメカニズムは(20a)のwasと全く同様で、出来事時と基準時の時間関係も「先行性」である。違いはただ、アスペクト値が「完了」であるということだけである。ここで詳しく考察すべき点は、間接話法補部に生じている過去形wasの基準時はどの時点かということである。その際、間接話法補部のもつ言語環境の特性がポイントとなる。間接話法を用いる場合でも、通例、元話者の発話内容を損なわない形で伝達することが要求されるが、そのためには、元話者の観点が存在する時点に(伝達)話者の状況視点(VSD)を移動させることによって元話者と同じ観点に立つことが望ましいと思われる。(この「観点(Standpoint)」という用語は、「視点」や「意識」を包括する概念であり、任意の人物の立場という意味合いで用いてある。)したがって、この言語環境では(伝達)話者の状況視点が(元話者の観点が存在する)元発話時におかれるのがデフォルトであり、元発話時を基準時としてwasの出来事時を測る解釈が無標となる。¹⁴ここで問題にしている主節時と補文時の時間関係が同時関係だとすると、結果として、基準時となる元発話時から見た当該出来事時の時間値は「同時性」ということになる。また、アスペクト値に関しては、wasが状態動詞であることから「未完了」となる。(20b)の文全体の時制解釈のメカニズムを図式化すると、下の図7のようになる。

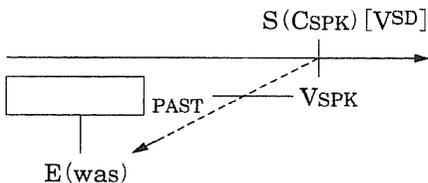


図6：(20a)の時間図式

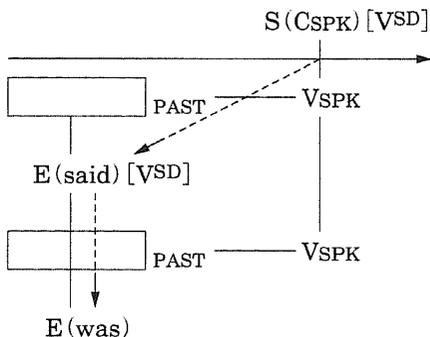


図7：(20b)の時間図式

本稿の時間図式においては、破線矢印は「視線」の流れを表し、矢印の出所が基準時、矢印の先がターゲットとなる出来事時である。また、出所にある状況視点（VSD）はターゲットである出来事時を眺める（測る）ための状況視点であり、原則としてターゲットとなる出来事時の数だけ状況視点が存在することになる。

時制解釈の種類分けを考えた時、基準時が発話時か否かによって分けることが1つ可能である。本稿では、発話時を基準時として出来事時を測る時制解釈を直示的解釈（Deictic Interpretation）、発話時以外の時点を基準時として出来事時を測る時制解釈を非直示的解釈（Non-Deictic Interpretation）と呼ぶことにする。したがって、(20a)のwasならびに(20b)のsaidは直示的解釈の例であり、(20b)のwasは非直示的解釈の例ということになる。以上の観察から、絶対時制形式の時制解釈は、状況視点のおかれる時点に応じて、直示的解釈も非直示的解釈も可能であるということになる。

2.3.2. 相対時制形式の時制解釈

次に、相対時制形式の時制解釈のメカニズムを見ていく。相対時制形式の時制構造は相対時制部門のみで成り立つので、その時制解釈には相対時制部門におけるプロセスだけが関わることになる。相対時制形式の時制構造が表す時間情報はR-形態素の特性によって表される潜在的基準時と出来事時との時間関係であったので、その時制解釈の中心となるプロセスは潜在的基準時を同定することである（その結果、特定の時点が基準時として同定される）。相対時制形式では潜在的基準時の値が定まりさえすれば、（ターゲットとなる出来事時と結びついている）問題となる状況に言及するのに適した形式の選択が可能になると言えるので、出来事時を測るための基準時が形式選択の中心となる基準点の役割も兼ねているということになる。前節で見たように、基準時は話者の状況視点がおかれる時点であった。以上をまとめると、相対時制形式では、時制形式選択と出来事時測定のための中心となる視座が連動しており、ともに状況視点がおかれる時点がその役割を果たしているということになる。すなわち、相対時制形式の選択は状況視点のおかれた時点を中心に行われるのであり、その出来事時を測る基準時も同じ状況視点のおかれた時点であると言える。したがって、相対時制形式の時制解釈については、時制形式選択のための基準点と出来事時測定のための基準時が同一になることを考慮して、以後「～基準」とまとめて呼ぶことがある。

以上を念頭において、相対時制形式の時制解釈のメカニズムを具体的に見ていこう。まずは英語の例として、現在分詞形を取り上げてみる。(21)をご覧いただきたい。(21)は会話体テキストと仮定する。

(21) Those sitting on the benches were asked to leave. (Comrie 1985: 22)

現在分詞形の時制構造は「出来事時の潜在的基準時に対する同時性」であった (cf. (12a))。 (21) の現在分詞形 *sitting* は (主語位置にある) 名詞句内の修飾要素であり、したがって主節動詞 *were* とは統語的には姉妹関係にないという点で主節動詞の直接の影響を受けない言語環境にある。それゆえ、時制解釈に関しては必ずしも主節動詞に従属する必要はなく、その結果、主節時基準の解釈 (非直示的解釈) だけでなく発話時基準の解釈 (直示的解釈) も許す。¹⁵

まず、主節時基準の解釈のメカニズムから見ていく。この場合、現在分詞形 *sitting* の出来事時を測るために主節の過去形 *were* の出来事時の上に状況視点がおかれ、それが基準時となる。現在分詞形の時制構造は「潜在的基準時から見た同時性」を表すので、*sitting* の出来事時は基準時と同定された *were* の出来事時との同時関係を表す。また、この *sitting* は基準時において進行中の状況を表すので、アスペクト値として進行相の解釈も同時に表す。この解釈メカニズムは、下の図8の左側に示されるとおりである。一方の発話時基準の解釈のメカニズムであるが、この場合は、現在分詞形 *sitting* の出来事時を測るために状況視点が発話時の上におかれ、その結果、基準時は発話時ということになる。現在分詞形の「同時性」という時制構造が与えられると、最終的に *sitting* の出来事時は基準時である発話時との同時関係を表すことになる。この場合も、進行相の解釈を同時に表す。この解釈メカニズムは、下の図8の右側に示されるとおりである。

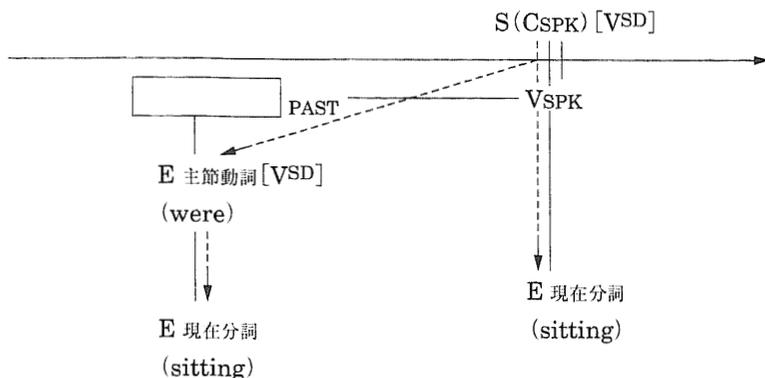


図 8：主節動詞の直接影響下でない言語環境の場合

以上の観察から、非定形動詞の場合も、状況視点のおかれる位置に応じて直示的解釈（発話時基準の解釈）と非直示的解釈（主節時基準の解釈）が可能であることが分かった。ここではいちいち検討しないが、同様のことが基本的に他の英語の非定形動詞の場合にも当てはまる。^{16,17}

次に、日本語の例として、「ル」形と「タ」形を取り上げてみる。はじめに、「ル」形から見ていく。「ル」形は、「出来事時が潜在的基準時に対して非先行関係にある」という時制構造を表すのであった（cf.(14a)）。換言すれば、「ル」形は潜在的基準時に対して潜在的に同時性もしくは後続性を表せるということになる。

この時制構造をもつ「ル」形が任意の言語環境に生じた時に、その環境の特性の影響を受けて解釈値が定まっていくことになる。その際、以下のような解釈原理が発動する。

(22) 「ル」形の時制解釈原理：

- a. 非状態的状况の場合は基準時から見た後続関係を表す。
- b. 状態的状况の場合は基準時から見た同時関係を表す。

ここで言う「非状態的状况」とは「非状態述語が表す 1 回読みの場合」を想定しており、非状態述語でも習慣読みや総称読みの場合は、状態述語が表す状況とともに「状態的状况」に入る。また、本稿では、ほとんどの補助動詞（例：

テイル、テアル、テシマウ) や法助動詞 (例: ダロウ、カモシレナイ、チガイナイ) は状態述語に分類されるとする (2.2.3節でも触れたように、本稿の立場からは、これらの法助動詞や補助動詞も独自の出来事時を表すことができる)。¹⁸

では、「ル」形の時制解釈のメカニズムを具体的に見ていこう。(23) をご覧いただきたい。

- (23) a. 恵里が来る。
 b. 毎月1日に、恵里が来る。
 c. 和也は病気だ。
 d. 文也は泳いでいる。

(23) はすべて会話体テキストとする。まず、問題となる述語はすべて独立節に生じている。加えて、日本語の定形述語は相対時制形式なので、時制形式選択のための基準点と出来事時測定のための基準時が連動する。したがって、状況視点 (VSD) が発話時におかれ、その結果、発話時が当該「ル」形を選択するための基準点になると同時に、当該述語の出来事時を測るための基準時にもなる。すなわち、発話時基準の解釈となる。(23a) では「来る」という非状態述語が用いられており、特に習慣読みや総称読みを喚起するような要素もないので、当該状況は非状態的狀況を表すと考えられる。したがって、原理(22a) が発動し、ここでの「ル」形は発話時から見た後続関係を表す。(23b) では「毎月1日に」という習慣読みを促す要素があるために、状態的狀況を表すと解釈される。したがって、原理(22b) が発動し、ここでの「ル」形は発話時から見た同時関係を表す。(23c) の「病気だ」も (23d) の「テイル」形・「泳いでいる」も状態述語であり、状態的狀況と解釈される。したがって、原理(22b) が発動し、両者ともに発話時から見た同時関係を表す。図9が「発話時から見た後続性」を、図10が「発話時から見た同時性」を表す時間図式である。

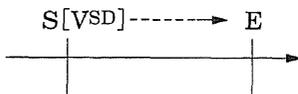


図9: 「ル」形の「後続関係」

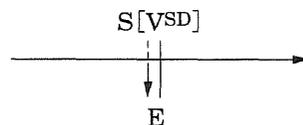


図10: 「ル」形の「同時関係」

次に「タ」形に移ろう。「タ」形は、「出来事時が潜在的基準時に対して先行関係にある」という時制構造を表すのであった (cf. (14b))。「タ」形の場合は「ル」形の場合と違って、出来事時と潜在的基準時との間に潜在的に複数の時間関係が当てはまるわけではないので、(22) のような原理は存在しない。しかしながら、任意の言語環境に生じた時にその環境の特性の影響を受けて解釈値が定まっていくという点では、「ル」形の場合と同じ解釈メカニズムである。

具体例で考察してみよう。(24) をご覧いただきたい。(24) も会話体テキストとする。

- (24) a. 陽子は買い物に出かけた。
 b. 陽子は、買い物に出かけた後 (で)、辰子に家に寄る (と思うよ)。

(24a) の「出かけた」は独立節に生じているので、状況視点 (VSD) が発話時におかれ、その結果、発話時基準の時制解釈となる。一方、(24b) の「出かけた」は時間節内にあることに注意されたい。この言語環境は主節内容が生じる (当てはまる) 時点についての情報を与える修飾部分であるという点で主節命題を構成する部分と言え、その意味で主節に従属・依存していると言える。したがって、この環境に生じる述語の時制解釈は、その言語環境の特性から主節時基準となる。独立節に生じる「タ」形の時間関係は図11に、時間節に生じる「タ」形の時間関係は図12に表されるとおりである。

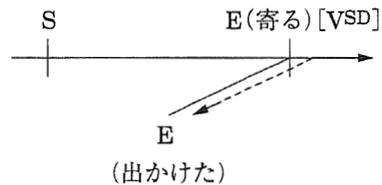
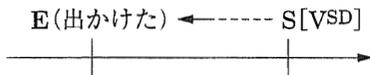


図11：独立節の「タ」形の時間図式

図12：時間節の「タ」形の時間図式

また、「ル」形や「タ」形の時制解釈は、出来事時と基準時の時間関係 (テンス的な値) というよりは、アスペクト的な値が前面に出てくることがある。¹⁹⁾ (25) をご覧いただきたい。

- (25) a. 陽子は、買い物に出かけた時 (に)、辰子の家に寄る (と思うよ)。
 b. 陽子は、買い物に出かける時 (に)、辰子の家に寄る (と思うよ)。

ここでは、時間節を導く名詞「時 (に)」のもつ語彙的特性により、主節と従属節の状況は時間的にある点に収斂すると考えられる。²⁰ 本稿では一般的なアスペクトの定義に従い、アスペクトを「(任意の時点(基準時)における)問題となる状況の内部構造の見方」とする(Comrie 1976)。したがって、時間節「～時 (に)」における「ル」形と「タ」形は、基準時である主節時において収斂するような時間解釈、すなわち、アスペクト的な解釈を表すことになる。より具体的に言えば、「タ」形は「先行性」という時制構造をもつので、基準時に収斂すると「完結的アスペクト」を表すのに対し、「ル」形は「非先行性」という時制構造をもつので、基準時に収斂すると「非完結的アスペクト」を表すことになる。(この解釈強制は、「タ」形と「ル」形の時制構造と矛盾しない範囲で行われていることに注意されたい。) (25a) では、「寄る」の出来事時が基準時となり、その時点における「出かける」という状況が完結した(直)後の局面を表している。一方の(25b)では、基準時である「寄る」の出来事時において、「出かける」という状況が生じるのと同時の局面を表している(場合によっては、当該状況が生じる(直)前の局面も表せる)。この解釈メカニズムを図式化したものが、下の図13である。実線の長方形は当該状況の直前の局面を、点線の長方形は当該状況と同時(場合によっては、直後も含む)の局面を表している。

以上、相対時制形式の日本語の例として、「ル」形と「タ」形の時制解釈のメカニズムを見てきた。両形式とも、生起する言語環境の特性の影響を受けて状況視点のおかれる時点が決まり、その時点を基準時とした時制解釈となる。また、「ル」形も「タ」形もともに、英語の定形動詞(絶対時制形式)や非定形動詞(相対時制形式)と同様、直示的解釈も非直示的解釈も可能である。

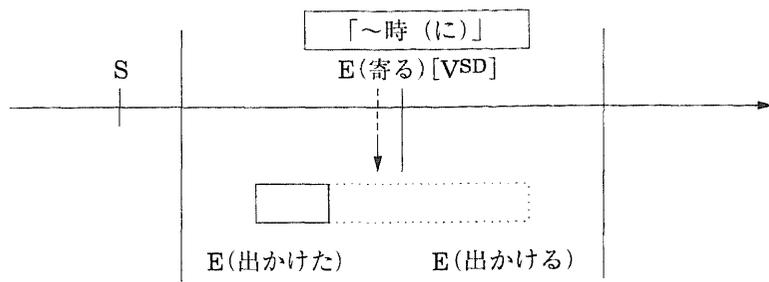


図13：時間節「〜時(に)」における「ル」形・「タ」形のアスペクト的解釈

2.4. まとめ

2節のまとめとして、本稿のアプローチの特色ならびに有益な点をもう一度簡単に見ておこう。まず、英語の定形動詞は絶対時制形式であるのに対し日本語の定形述語は相対時制形式であり、この点が日英語の時制体系における極めて大きな違いである。また、日本語の定形述語は時制構造から見れば英語の非定形動詞と同じタイプに分類され、次節でも明らかになるように、このことが、日本語では定形述語が用いられる環境において、しばしば対応する形式として英語では非定形動詞が用いられることへの動機付けとなっている。ただ、こういった違いはあるものの、時制解釈のプロセスにおいては、絶対時制形式も相対時制形式も生起する言語環境の特性に応じて直示的解釈も非直示的解釈も表すことが可能なので、時制構造は違っても最終的に得られる時制解釈値は同じになることがある。さらに、生起する言語環境の特性に合わない時制構造をもつ時制形式はその環境には生じ得ないことも、本稿のアプローチでは説明可能である。

次節では、以上の特色をもつ本稿のアプローチが、「内」の視点に関わる言語環境における時制現象の説明にも有効であることを詳しく見ていく。このことは、同時に、われわれの分析法の妥当性も高めることになる。

3. 「内」の視点に関わる言語環境における時制解釈

「内」の視点に関わる言語環境としては、本稿では知覚動詞補部、ト書き連鎖、主要部内在型関係節の3つを取り上げ、それぞれの環境における日英語の

動詞（述語）の時制解釈のメカニズムを明らかにすることになる。また、特定の言語環境においてなぜ特定の時制形式が用いられないのかについても、当該時制形式のもつ時制構造とそれが生起する言語環境の特性が矛盾する（合致しない）ためであることを確認していく。

3.1. 知覚動詞（述語）補部

3.1.1. 2種類の知覚動詞補部

まずは知覚動詞補部の時制現象から見ていくことにする。本稿では、2種類の知覚動詞補部を区別することに注意されたい。1つは、知覚動詞の知覚対象を描写する部分というだけでなく、統語的にも知覚動詞の補部となっているタイプである。このタイプを知覚動詞の統語的補部と呼ぶことにする。知覚動詞の統語的補部に生じる動詞（述語）形式は、英語では非定形（原形不定詞・現在分詞・過去分詞）、日本語では定形（「ル」形・「タ」形）である。また、日本語では知覚動詞補部マーカーとして「ノ」もしくは「トコロ」が選ばれるという点にも注意されたい。²¹ (26)は英語の、(27)は日本語の例である。なお、3.1節を通して、具体例中の知覚動詞には二重下線を、統語的補部の述語には一重下線を引いてある。²²

- (26) a. Bruce saw Mary cross the street.
 b. Grace saw George dancing alone.
 c. He saw Kim mauled by our neighbor's dog.
- (27) a. 健は美沙子が通りを横切る |の／ところ| を見た。
 b. 直美は剛史がひとりで踊っている |の／ところ| を見た。
 c. 良平は由理が近所の犬に吠えられた |の／ところ| を見た。

もう1つは、統語的には独立節なのだが、知覚動詞の知覚対象を描写している部分になっているタイプである。このタイプを知覚動詞の意味的補部と呼ぶことにする。知覚動詞の意味的補部に生じる動詞（述語）形式は、英語も日本語も定形である。(28) (29) をご覧いただきたい。なお、本節では意味的補部に当たる部分も一重下線部で表すこととする。

- (28) When Michael Corleone arrived at his father's house in Long Beach he found the narrow entrance mouth of the mall blocked off

with a link chain. The mall itself was bright with the floodlights of all eight houses, outlining at least ten cars parked along the curving cement walk. (M.Puzo, *The Godfather*, p.89)

- (29) …竹山はかたわらの奈緒美を見た。白と黒の格子の和服が、奈緒美を大人っぽく見せ、その横顔は、もう少女にはない寂しさをただよわせている。

少女たちが柵の近くに群がって、牧場の羊群をバックに写真を撮り合っている。この少女たちも、五年も経たぬうちにどんな道を歩むことかわからない、と竹山は教師らしい感慨にふけた。

(三浦綾子『ひつじが丘』 pp.330-331)

3.1.2. 知覚動詞補部の特性と時制形式

ここで生じてくる疑問は、なぜ英語では統語的補部では非定形を要求するのに意味的補部では定形なのか、それに対して日本語ではどちらの言語環境でも定形なのか、という点である。この問題は2つに分けて考える必要がある。まず、統語的補部は主節動詞である知覚動詞にいわゆるc-統御される位置に生じる節であるという点に注意されたい。次に、この統語的補部は一般に小節 (Small Clause) を形成すると言われ、主節動詞との結びつきがいわゆる時制文 (Tensed Clause) より強いという点にも注意されたい。²³ これらの点を考慮すると、われわれの枠組みでは統語的補部に生じる述語 (動詞) は主節動詞の直接影響下におかれることになり、この環境は主節時基準という特徴をもつことになる。²⁴ ここで、絶対時制形式の時制構造には時制形式を発話時基準で選択するための礎となる時制視点という概念が内在化していたことを思い出していただきたい。英語の定形動詞は絶対時制形式であった。それゆえ、その時制構造は知覚動詞の統語的補部のもつ「主節時基準」という特徴と矛盾することになる。したがって、われわれの枠組みでは、知覚動詞の統語的補部には英語の定形動詞は生じ得ないという体系的な説明が可能である。一方、英語の非定形と日本語の定形は相対時制形式なので、この言語環境の「主節時基準」という特徴に合致する時制構造をもつ。なぜなら、相対時制形式は生起する言語環境の特性に応じて基準時が決まるからである。それゆえ、相対時制形式である日本語の定形述語は、この環境に問題なく生じることができるのである。

次に意味的補部であるが、この言語環境は統語的には独立節、すなわち、時制文と同じである。したがって、知覚動詞の直接影響下におかれて知覚動詞の

表す時点が基準となるといったような制約は関係してこない。それゆえ、時制形式選択に関しては、普通の独立節に生じる時制形式の選択パターンと同じになり、英語では絶対時制形式が生じると説明できる。ただし、意味的補部の動詞の出来事時を測る基準時は、状況視点がおかれていると解釈できる知覚動詞の表す時点である。これには、後で見るように、「知覚の同時性」に関わる制約が関係してくるからである。一方の日本語の場合であるが、当該時制形式が生起する言語環境の特性に左右される形で時制形式選択の基準点と出来事時測定の基準時が決まるのであった。この言語環境は独立節とはいえ、話者の状況視点が知覚動詞の表す時点におかれるので、相対時制形式の時制構造の特性からその時点を経験した時制形式選択と出来事時測定が行われる。したがって、相対時制形式である日本語の定形述語がこの言語環境に生じても何ら矛盾がないと説明できる。この主張を裏付けるように、(29)の下線部の2つの「ル」形（「ただよわせている」・「撮り合っている」）は、知覚動詞「見た」の表す時点から見た「同時性」を表しているのであって、発話時（ナレーション時）から見た「同時性」を表しているわけではない。

3.1.3. 「知覚の同時性」制約

解釈メカニズムの具体的な考察に入る前に、この言語環境の特性として知覚に関する制約があることを確認しておく必要がある。その制約とは、「知覚の同時性」制約という名で言及できる類のものである。これは、一般に何かを知覚するためには知覚時と同時に知覚対象・知覚内容が存在していなければ知覚できないという認知的な制約からの必然的帰結である（cf. Kirsner & Thompson 1976；中右 1980；高橋 1999）。

また、知覚動詞補部は知覚主体の知覚対象・知覚内容を記述している部分なので、知覚主体の体験している知覚対象・知覚内容を話者が体験するには、その対象・内容を共有するための何らかの手段を講じる必要がある。われわれの枠組みでは、話者が自らの状況視点を知覚主体のそれに同化させることによって、知覚主体の観点を通じて当該状況を体験することができるということになる。したがって、話者の状況視点が存在する（同化した）知覚主体の観点が存在する時点、すなわち、知覚時が、知覚動詞補部の状況の出来事時を測るための基準時となる。

以上の観察から、この言語環境における「知覚の同時性」制約は、(30)に示されるとおりとなる。

- (30) 知覚動詞補部が表す状況の出来事時は、基準時である知覚動詞の出来事時との同時関係を表す。

ここで言う「同時関係」には、時間的接触関係も含まれる。統語的補部であれ意味的補部であれ、知覚動詞補部における時制解釈（出来事時測定）はすべてこの「知覚の同時性」制約の影響を受けることになる。

3.1.4. 統語的補部の時制解釈

それでは、知覚動詞補部という言語環境における時制解釈のメカニズムを詳しく見ていくことにする。まずは、英語の統語的補部に生じる非定形動詞の時制解釈から見ていく。言及のしやすさを考慮して、(26) を下に再掲する。

- (26) a. Bruce saw Mary cross the street.
 b. Grace saw George dancing alone.
 c. He saw Kim mauled by our neighbor's dog.

(26a) から順次考察していくことにしよう。2.2.3節で見たように、原形不定詞は「潜在的基準時との時間関係は無指定」という時制構造をもつのであった。換言すれば、原形不定詞は生起する言語環境の特性の影響を受けて、その時間値が定まると言える。したがって、(30) の「知覚の同時性」制約から、原形不定詞 *cross* の出来事時は知覚動詞 *saw* の出来事時との同時関係を表すと解釈される。このメカニズムを図式化すると、図14のようになる。（本節では、便宜上、状況視点に関しては知覚動詞補部内の出来事時を測るための状況視点のみを明示することにする。）

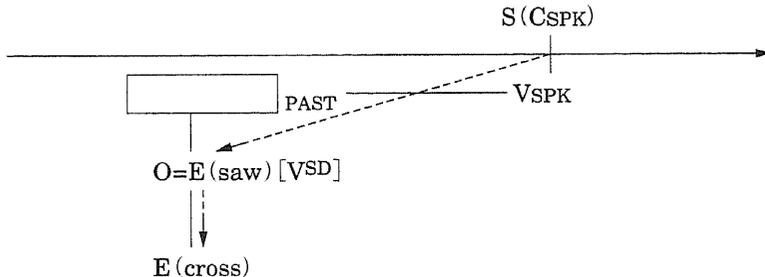


図14：(26a) の原形不定詞の出来事時と知覚時との同時関係

次に、(26b) の現在分詞の例に移ろう。これもすでに見たように、現在分詞 dancing 自体は「同時性」という時制構造をもつ。また、この場合にも、知覚動詞補部という言語環境の特性から「知覚の同時性」制約が発動する。したがって、E(dancing) はその時制構造と「知覚の同時性」制約から、知覚時である E(saw) を基準時とした同時性の解釈を受ける。このメカニズムは、図15に図式化される。

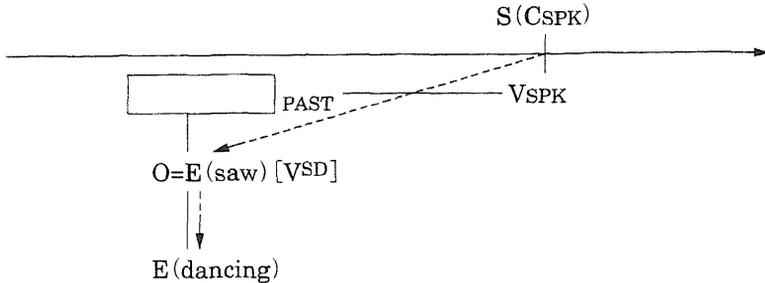


図15：(26b) の現在分詞の出来事時と知覚時との同時関係

最後に、(26c) の過去分詞の時制解釈のメカニズムである。これは、上述の2例に比べて若干複雑である。過去分詞 mauled 自体は「先行性」という時制構造をもつので、とりあえず基準時である E(saw) より先行する値を示すと解釈される。ところが、この言語環境では「知覚の同時性」制約が関わってくる。それゆえ、この制約を満たすために、過去分詞の出来事時 E(mauled) は「引っかけられる」という出来事の起こった時点だけでなく、その後の時点（「引っかけられた後」という結果状態の当てはまる時点）をもカバーするように解釈強制が行われる。その結果、E(mauled) は基準時である主節動詞の出来事時 E(saw) との同時性（時間的接触関係）という解釈値を表すことになる。なお、本稿で言うところの「解釈強制」とは、特定の言語環境の特性の要請を受けて、当該時制形式の解釈値がそれに合致するように解釈を強制させる現象のことを言う。²⁵ このメカニズムを図式化すると、図16ようになる（ここでは、便宜上、定形動詞の時制構造に関わる部分は簡略化してある）。

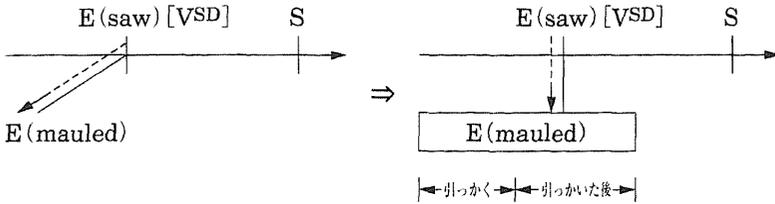


図16：(26c)の過去分詞の出来事時の拡張のメカニズム

英語の統語的補部における時制解釈のメカニズムを一通り見終えたので、次に日本語の例へと移ることにする。ここでも言及のしやすさを考慮して、(27)の例を下に再掲する。

- (27) a. 健は美沙子が通りを横切る |の／ところ| を見た。
 b. 直美は剛史がひとりで踊っている |の／ところ| を見た。
 c. 良平は由理が近所の犬に吠えられた |の／ところ| を見た。

まず、(27b)の「テイル」形・「踊っている」から考察を始める。「踊っている」はわれわれの枠組みでは定義上状態的状况を表すので、2.3.2節で見た原理(22b)により、基準時である知覚時(「見た」の出来事時)との同時性という解釈値を表す。これは「知覚の同時性」制約とも合致するので、これがそのまま当該述語の時制解釈値となる。

次に、(27a)の「ル」形・「横切る」の時制解釈へと移る。「横切る」はわれわれの枠組みでは定義上非状態的状况を表すので、原理(22a)からは、基準時である知覚時(「見た」の出来事時)から見た後続関係を表すはずである。しかしながら実際は、知覚時との同時関係を表すと解釈される。これは、この言語環境のもつ特性が課す「知覚の同時性」制約のため、これを満たすための解釈強制が行われるからである。ここでは、「知覚の同時性」制約(30)が発動した結果、知覚している時間帯に問題となっている状況が当てはまるというように解釈し直される。すなわち、同時性を表すように解釈強制がなされているのである。(27a, b)の2つの同時関係を図式化したものが、下の図17である。

では、(27c)の「タ」形・「吠えられた」の解釈メカニズムはどうなっているのだろうか。「タ」形自体は「潜在的基準時から見た先行関係」を表すので、この言語環境の特性から基準時が知覚時(「見た」の出来事時)と同定される

と、この「タ」形は知覚時に対する先行性を表すことになる。しかしながら、ここでも「知覚の同時性」制約が解釈強制を引き起こす。この環境での「タ」形は、「先行性」を維持しつつも知覚時との同時性（時間的接触性）を表せる解釈、すなわち、「完了」というアスペクト値を表すように解釈強制されるのである。この時間的接触性は、「吠えた後」の状態もカバーするように補部の出来事時 E の時間幅が拡張されることで生じる。この時間関係は、図18に図式化される。

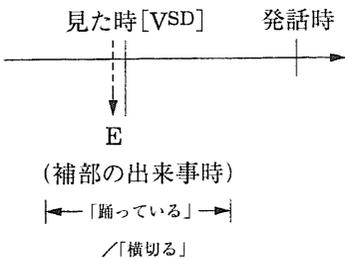


図17：(27a) の「ル」形・(27b) の「テイル」形の出来事時と知覚時との同時関係

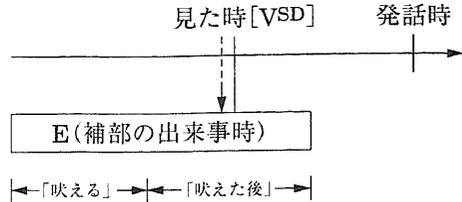


図18：(27c)の「タ」形の出来事時が拡張した結果の知覚時との同時関係

3.1.5. 意味的補部の時制解釈

次に、意味的補部の時制解釈へと移ろう。まずは英語の事例からである。(31) - (33) をご覧いただきたい。

(31) When Michael Corleone arrived at his father's house in Long (=28) Beach he found the narrow entrance mouth of the mall blocked off with a link chain. The mall itself was bright with the floodlights of all eight houses, outlining at least ten cars parked along the curving cement walk. (M.Puzo, *The Godfather*, p.89)

(32) As he was drinking Benjamin looked over the rim of his glass at Mrs Robinson. She was still sitting very straight in her chair looking out through the glass panels and into the dark back yard.

(C.Webb, *The Graduate*, p.95)

- (33) Charlie ignored him [=Neil] and got up to look around the room. A small blue suitcase stood on the floor by the door. A few books, some pretty tattered looking, lay on the bed. Charlie walked to the desk and picked up a framed picture of a beautiful girl who looked to be in her twenties.... (N.H.Kleinbaum, *Dead Poets Society*, p.121)

これらの例の意味的補部（一重下線部）において絶対時制形式が選択される理由は（例えば、(31)の一重下線部の was）、3.1.2節で見たとおりである。しかしながら、この言語環境は登場人物の視点、すなわち、「内」の視点に関わる言語環境であるので、話者（ナレーター）は登場人物の視点を経由して当該環境における状況を眺めていることになる。すなわち、話者は自らの状況視点を登場人物のそれに同化させることで、登場人物の「目」で当該状況を捉えていることになる。²⁶したがって、この環境における動詞（述語）の出来事時を測る基準時は話者の状況視点がおかれる時点である知覚動詞の表す出来事時ということになる。

(31)を基にして、意味的補部における動詞の時制解釈のメカニズムを詳しく見ていこう。まず、知覚動詞 found と意味的補部に生じる定形動詞 was は共に過去形であるが、これは絶対時制形式の場合、話者の時制視点と意識の融合によって発話時基準で時制形式が選択されるために、発話時（ナレーション時）から見た過去時に言及するには過去形が選ばなければならないためである。しかしながら、当該動詞 was の出来事時 E(was) を測る基準時は話者の状況視点がある時点、すなわち、当該登場人物マイケル・コルレオーネの知覚時 E(found) となる。この言語環境は知覚動詞補部ということで、「知覚の同時性」制約を受ける。したがって、当該状況である「遊歩道が明るい」という状況が当てはまっている時点 (was の出来事時) は「マイケルが気づく」という状況の生じた時点 (found の出来事時) を基準時とした同時性を表すことになる。この時制解釈のメカニズムは、図19で表されるとおりである。

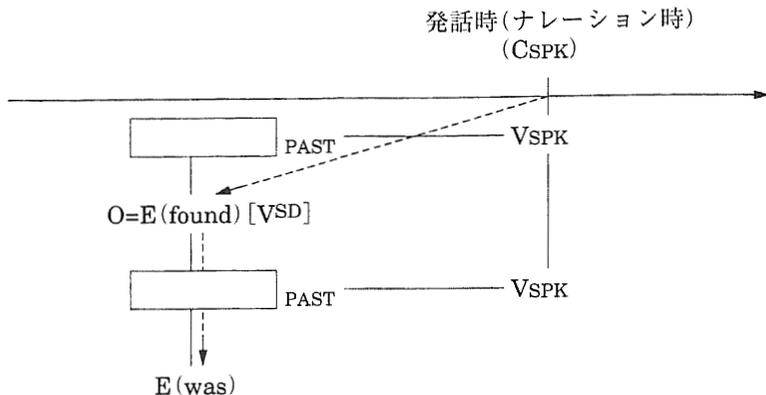


図19：(31)の意味的補部の過去形の時制解釈のメカニズム

ここではいちいち確認しないが、(32) (33) についても同様の解釈メカニズムが成立する。

次に、日本語の事例へと移ろう。(34)–(35) をご覧いただきたい。²⁷

(34) …竹山はかたわらの奈緒美を見た。白と黒の格子の和服が、奈緒美を(=29)大人っぽく見せ、その横顔は、もう少女にはない寂しさをただよわせている。

少女たちが柵の近くに群がって、牧場の羊群をバックに写真を撮り合っている。この少女たちも、五年と経たぬうちにどんな道を歩むことかわからない、と竹山は教師らしい感慨にふけた。

(三浦綾子『ひつじが丘』 pp.330–331)

(35) 彼[=次郎]はうっとりとなって、一心に青空を見つめた。するとそこに、ぼうっと黒ずんだ小さな影のようなものが現れた。お玉杓子の恰好をしている。それがすうっと空を動いては、どこかで消える。目を据えるとまた現れる。彼は幾度となくその影を逐った。

(下村湖人『次郎物語第1部』 p.58)

(36) 海岸の小さな町の駅に下りて、彼は、しばらくはものめずらしげにあたりを眺めていた。駅前の風景はすっかり変わっていた。アーケードのついた明るいマーケットふうの通りができ、その道路も、固く舗装されてしまっている。…

(山川方夫『夏の葬列』 p.6)

すでに見たように、日本語の定形述語は相対時制形式で、時制形式選択も出来事時測定とともに話者の状況視点がおかれる時点が基準となるのであった。また、この言語環境では話者は登場人物の視点を通じて当該状況を眺めているので、知覚動詞の出来事時が基準時となる。さらに、この環境では「知覚の同時性」制約が関わることになる。したがって、この言語環境では原則として、知覚時との同時性を表すことができる形式、すなわち、「ル」形が選ばれることになる。

例えば(34)では、基準時である「竹山が奈緒美を見た」時点から見て同時に当てはまっている「奈緒美の様子」や「近くにいる少女たちの様子」は「ル」形で表されているが、これは相対時制形式としての「ル」形の時制構造と知覚動詞補部の特性との相互作用からの帰結と言える。この時制解釈のメカニズムは、図20に示されるとおりである。

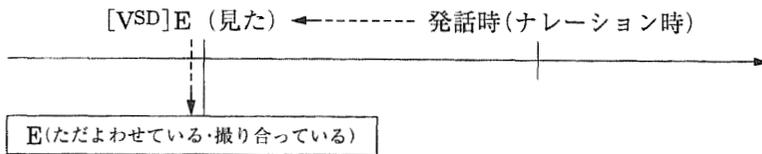


図20：(34)の意味的補部の「ル」形の時制解釈のメカニズム

(35)(36)の「ル」形の時制解釈のメカニズムも同様である。しかしながら、ここで少し注意しておきたいのが、例えば、(35)の意味的補部に「タ」形・「現れた」が出現している点である。時制構造としては「先行性」を表す「タ」形が、知覚の同時性を要求するこの言語環境に生じることは、一見矛盾するように思える。しかしながら、ここでは統語的補部の「タ」形の場合と同じく解釈強制が働いているのである。すなわち、「ある物体の出現」という出来事そのものとその結果状態である「その物体が視界に写っている」という状況を「現れた」の出来事時がカバーするように解釈強制された結果、「知覚の同時性」制約が保たれているのである。

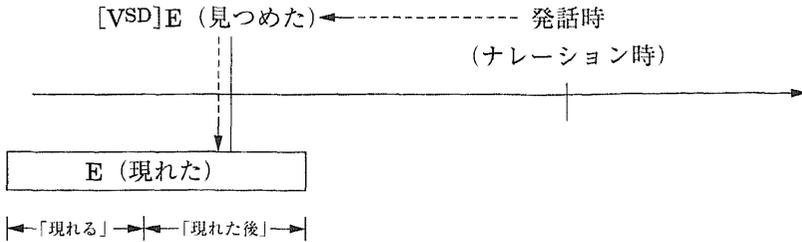


図21：(35)の意味的補部の「タ」形の時制解釈のメカニズム

3.1.6. まとめ

以上、3.1節では知覚動詞の統語的補部と意味的補部における時制現象を、英語と日本語の場合それぞれについて考察してきた。その結果、本稿の枠組みの下、時制形式自体がもつ時制構造と言語環境のもつ特性の相互作用の結果、この環境における様々な時制現象を体系的に説明できることが分かった。

3.2. 「ト書き連鎖」

次に、「内」の視点が関わる2つ目の言語環境として、坪本(1995, 1998, 1999, 2001, 2002a, 2002b)が「ト書き連鎖」と呼ぶ言語環境における時制解釈のメカニズムを見てみよう。

3.2.1. 「ト書き連鎖」の特性

「ト書き連鎖」については坪本の一連の研究で体系的かつ包括的に扱われているが、本稿は基本的にその分析を受け入れ、本稿が依拠する時制理論に基づけばその時制現象に対してより体系的な説明が与えられることを示す。「ト書き連鎖」は、形式的には英語でNP-XP、日本語でXP-NPの連鎖形となり(XPはXに任意の品詞がくる述部)、意味的には「典型的に、所与の場面に埋め込まれた、眼前の場面状況を描写・説明する映像的表現」と定義される(坪本1998:182-186; 2001:第三章)。このNP-XPまたはXP-NPの連鎖は、形式的には「モノ(実体)」の描写(XPによる修飾を受けたNP)のように見えるが、意味的には「コト(状況)」をも同時に描写する(NPはXPに対して主語の意味関係)表現法である。したがって、全体では2つの要素の合成以上の意味をもつことになり、ゲシュタルト的性質をもつと言えるので、一種の「構文」である。²⁸ また、「所与の場面に埋め込まれた眼前の状況描写」という特

性から、XP は一時的な状況を表す傾向が出てくる。

なお、「ト書き連鎖」は典型的には「眼前の場面描写・説明」に用いられるが、拡張例として認識や判断の用法もある。また、「ト書き連鎖」には、ト書きだけでなく、映画などのシナリオや小説の中の場面描写、新聞の見出しなども含まれることに注意されたい。本稿では、小説中の場面描写の「ト書き連鎖」を中心に観察するので、登場人物の眼前の場面描写・説明の用法だけでなく場面回想などの認識・判断の用法も分析の対象となる。

上で見た「ト書き連鎖」の特性を、具体例で観察してみよう。まずは典型例である (37) をご覧いただきたい。なお、3.2節中を通して「ト書き連鎖」部分は下線部で示される。

- (37) a. タクシーの窓から白く乾いた道の片側に植えられたガジュマルの並木が続く。車がまきあげる砂煙。並木の向うにひろがる小麦島。…
(遠藤周作『深い河』 p.258)
- b. Dereck (,) running around the track. (坪本 2002a : 58)

例えば、(37a) では「車がまきあげる」がXP, 「砂煙」がNPであり、(37b) では Dereck がNP, running around the track がXP である。(37a) は、登場人物の1人である磯辺という人物がインドのある場所を移動中目にした場面の描写であるので、日本語の典型的な「ト書き連鎖」の例である。²⁹ また、(37b) も Dereck という人物が話者の眼前で練り広げる行動を描写しているので、英語の典型的な「ト書き連鎖」である。

次に、拡張例である認識・判断用法の事例を見てみる。(38) をご覧いただきたい。³⁰ ((38b) は (38a) の英語版である。)

- (38) a. この時、ふしぎに心に甦ってきたのが、見すほらしい修道服で大きな編上靴を動かしながらベルクール広場を歩いていた大津の姿だった。こちらの気持ちに気づかず玉ねぎの話ばかりしている大津。…
(遠藤周作『深い河』 p.110)
- b. Strangely, the image that was awakened in her mind at this moment was Ōtu, walking across the place Bellecour in his seedy robe and huge lace-up boots. Ōtu, oblivious to her feelings, blabbering on about his Onion... (S.Endo, *Deep River*, pp.67-68)

「ト書き連鎖」の直前部分に回想へと導く内容を表す表現（「心に甦ってきた」や the image）が来ていることから、この「ト書き連鎖」は認識・判断の用例であることが伺える。実際、この部分は登場人物・美津子の回想シーンの一部として描かれている。

この拡張例は、本稿の枠組みでは次のように捉えられる。すなわち、登場人物の「観点」（「視点」と「意識」を含む概念）の一部である「状況視点」が回想対象の当てはまっている時点に移動した結果、回想されている場面があたかも登場人物の眼前で展開しているかのように描かれていると捉えられるのである。（38）は、美津子の脳裏に大津なる人物の姿が生々しく、まさに眼前にいるかのように思い出されているシーンであるので、この捉え方を支持していると言えよう。

3.2.2. 「ト書き連鎖」の時制解釈のメカニズム

では、具体的に「ト書き連鎖」の時制解釈のメカニズムを見ていこう。まずは日本語の典型例（39）-（41）をご覧ください。

（39）レンコ（バスに）飛び乗る。閉まるドア。

（シナリオ『お引越し』；坪本 2001からの再掲載）

（40）タクシーの窓から白く乾いた道の片側に植えられたガジュマルの並木が続く。車がまきあげる砂煙。並木の向うにひろがる小麦畑。…（= 37a）

（遠藤周作『深い河』 p.258）

（41）二〇〇〇ミリ望遠がいっばいにズームした。街は、十七インチの画面いっばいに、まるで手にとるように俯瞰された。古びた藁、白い壁の洋風の家、—瓦はあちこちこわれ、数尺におよぶ草がはえている所がある。家々の戸や窓はほとんどとざされ、ところどころ、うつろな暗い口をポッカーリあけている。電柱に、色あせた質屋の看板が見える。街路には、舗装のこわれた所から草がはえ、赤錆のスクラップと化した自動車が、塀や電柱にぶつかったり、道路のまん中にのりすてられたりしていた。

（小松左京『復活の日』 pp.16-17）

この言語環境でも知覚動詞補部と同様、相対時制形式である日本語の定形述語は話者の状況視点がおかれる時点である知覚時を基準時とした時制解釈にな

る。「ト書き連鎖」は、眼前描写という意味特性上、何かしらの視点（視座）の眼前の状況を表すことになるので、知覚動詞補部と似ている言語環境と言えるからである（ただし、知覚動詞補部が「コト」的描写であるのに対し、「ト書き連鎖」は「モノ」と「コト」の両面同時描写である）。したがって、この言語環境でも「知覚の同時性」制約のようなものが働くことになるので、制約(30)を(42)に示すようなさらに一般的な原理に還元させることができる。

- (42) 知覚状況の時制解釈原理：知覚対象となる状況を表す述語の出来事時は、状況視点のおかれる時点を基準時とした同時関係（時間的接触関係）を表さなければならない。

ここで言う状況視点は、「ト書き連鎖」の状況を眼前で見ている（眼前に存在するかのように思い出している）人物（観察者・回想者）の状況視点と同化した話者（ナレーター）のものである。

この「知覚状況の時制解釈」原理を念頭において、(39)-(41)の時制解釈のメカニズムを見ていこう。まず、この典型用法では、状況視点がおかれる時点は知覚時である。(40)の「ひろがる」は状態的状況であるため、2.3.2節で見た原理(22b)から基準時である知覚時との同時性を表すと解釈される。これは、原理(42)とも抵触せず、このまま最終的な時制解釈値として得られる。

次に(39)の「閉まる」と(40)の「まきあげる」である。これらは非状態的状況であるために原理(22a)が適用されると、基準時である知覚時から見た後続性を表すはずである。しかし、この言語環境の特性から原理(42)が優先するので解釈強制が行われ、その結果、これらの述語が表す出来事も知覚時との同時性を表すことになる。ここでは、知覚している時間に幅があり、その時間内に当該出来事が生じる（展開する）と解釈できる。

最後に、(41)の「タ」形・「古びた」はどう解釈されるのであろうか。「タ」形は基準時から見た先行性を表すという時制構造をもつので、一見、(42)の「知覚状況の時制解釈」原理に違反するように思えるかもしれない。しかしながら、2.3.2節や3.1.5節で見たように、「タ」形は時制解釈の段階でアスペクトの解釈を受けることができる。ここでは、「知覚状況の時制解釈」原理(42)の要請により、知覚時（状況視点のおかれる時点）に収斂した形で「タ」形の時制解釈が行われなければならない。したがって、「古びる」というプロセスが終わった結果状態・「古びた後の状態」に焦点が当たり、この部分も当該

出来事時が表す時間幅に組み込まれるように解釈強制されるのである。その結果、知覚に対するわれわれの認知のあり方に矛盾しない形での時制解釈が成立するのである。

「ト書き連鎖」における「ル」形（例：(39)の「閉まる」・(40)の「ひろがる」）と「タ」形（例：(41)の「古びた」）の時制解釈のメカニズムを図式化すると、それぞれ図22・図23のようになる。

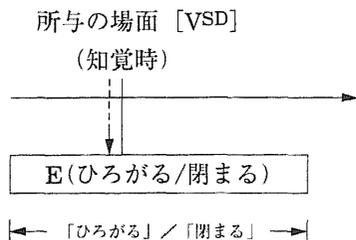


図22: 「ト書き連鎖」における「ル」
形の時制解釈

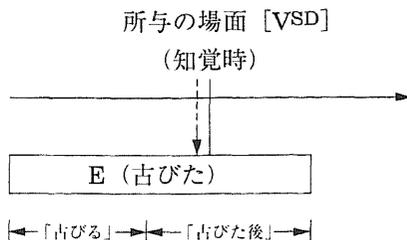


図23: 「ト書き連鎖」における「タ」形
の時制解釈（「結果」アスペクト
ト解釈）

英語の例に移る前に、日本語の「ト書き連鎖」の拡張例である認識・判断用法の事例を簡単に見ておこう。(43)をご覧ください。

- (43) a. この時、ふしぎに心に甦ってきたのが、見すばらしい修道服で大きな編上靴を動かしながらベルクール広場を歩いていた大津の姿だった。こちらの気持に気づかず玉ねぎの話ばかりしている大津。…（＝38a）
（遠藤周作『深い河』p.110）
- b. あの病室で我儘ひとつ言わず臥していた磯辺の妻の顔が浮かぶ。そしてほとんど毎日のように仕事を終えたあと、見舞に来ていたこの男。どこにでもいる平凡で目だたぬ夫婦。そんな夫婦の間にも誰も見抜けぬ彼等だけのドラマがあった。（遠藤周作『深い河』p.278）
- c. …勝呂はその切株をほんやりと眺め、おばはんのことをふと、考えた。雨の日に木箱に入れられて運ばれていったおばはん。ポプラの樹はも

うない。おばはんも死んでしまった。(遠藤周作『海と毒薬』 p.146)

これらの例は下線部の前の部分で回想シーンに入ることを明示したりほのめかしたりする表現があることから、認識・判断用法の例であることは明らかである。この拡張用法では、登場人物の回想に伴い、問題となる状況視点は知覚時(物語の現在)ではなく回想対象が当てはまっている時点へ移動している。したがって、この場合の基準時は回想対象の当てはまっている時点であり、状況視点がそこに移動することであたかも眼前でものごとが生じている(展開している)かのような効果を生むのである。それ以外は、少なくとも時制解釈のメカニズムに関しては、典型用法の場合と同じである。

したがって、(43a)の「ル」形・「話ばかりしている」の出来事時は基準時である回想時から見た同時性を表すのに対し、(43c)の「タ」形・「運ばれていった」の出来事時は回想時における「結果」アスペクトを表す。それぞれを図式化すると、図24・図25ようになる。

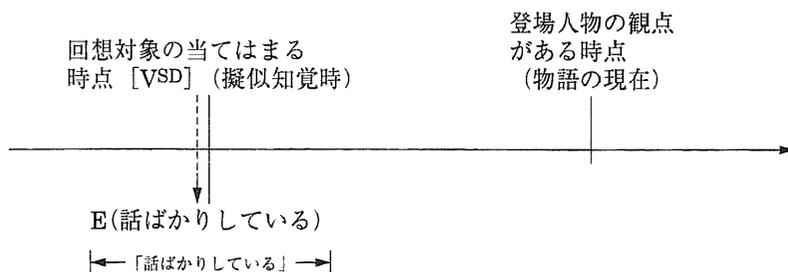


図24：認識・判断の「ト書き連鎖」における「ル」形の時制解釈

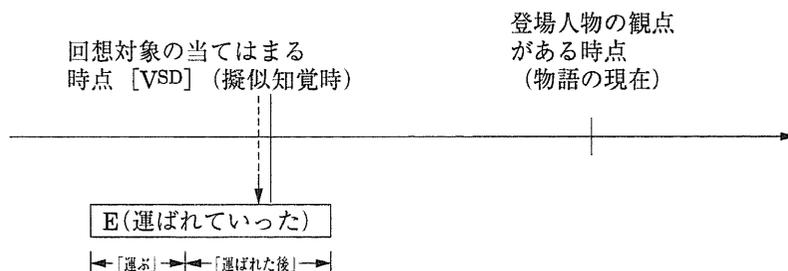


図25：認識・判断の「ト書き連鎖」における「タ」形の時制解釈(「結果」アスペクト解釈)

では、英語の例へと移ろう。(44) をご覧いただきたい。

(44) a. Fergus(,) walking outside Dil's apartment.

(*The Crying Game* ; 坪本 1998 : 183からの再掲載)

- b. Strangely, the image that was awakened in her mind at this moment was Ōtu, walking across the place Bellecour in his seedy robe and huge lace-up boots. Ōtu, oblivious to her feelings, blabbering on about his Onion...(=38b)

(S.Endo, *Deep River*, pp.67-68)

- c. ...Suguro gazed vacantly at the stumps. Suddenly he thought of the old lady—the old lady carried out beneath the falling rain inside a wooden crate. The poplar tree was gone. The old lady was gone.

(S.Endo, *The Sea and Poison*, p.152)

(44a) の下線部は典型的な用法, (44b, c) の下線部は認識・判断用法の例である。両者ともに, 基準時が知覚時(物語の現在)か回想内容が当てはまっている時点かの違いはあっても, 時制解釈に関しては違いがないことはすでに日本語の例で確認済みなので, ここではまとめて扱うことにする。

まず, (44a, b) の下線部では現在分詞形 *walking* ならびに *blabbering* が用いられているが, 現在分詞形は「潜在的基準時から見た同時性」という時制構造をもつので (cf. (12a)), 原理 (42) との相互作用により, 状況視点がおかれる時点(知覚時もしくは回想対象が当てはまっている時点)を基準時とした同時性という時制解釈値を表すことになる。一方の (44c) の下線部の過去分詞形 *carried* は「潜在的基準時から見た先行性」という時制構造をもつので (cf. (12b)), 知覚に関するわれわれの認知のあり方を満たすための原理 (42) が発動した結果, 解釈強制が生じる。その結果, 「結果」のアスペクト(時間的接触関係の一種)を表す解釈となる。それぞれの時制解釈のメカニズムを図式化すると, 図26・図27のようになる。

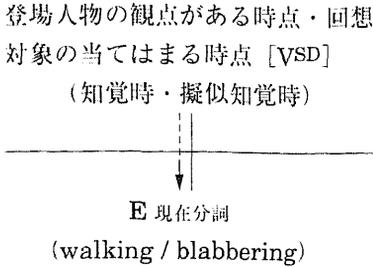


図26：「ト書き連鎖」における現在分詞形の時制解釈

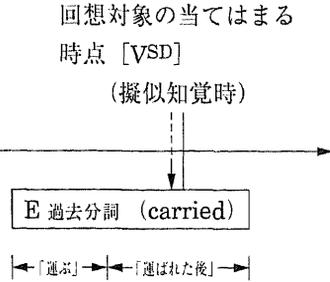


図27：「ト書き連鎖」における過去分詞形の時制解釈（「結果」アスペクト解釈）

ここで、英語の「ト書き連鎖」に現在形が用いられる場合の時制解釈のメカニズムを簡単に見ておこう。(45)をご覧ください。

(45) Ben asleep in bed and Elaine enters softly.

(*The Graduate* ; 坪本 2002a からの再掲載)

現在形は絶対時制形式で、その時制構造は「現在時区域のどこかに出来事時が生じる」というものであった (cf. 図 2 (i))。絶対時制形式は通例、時制解釈の際、その時制構造に内在化している時制視点が発話時に当てはまっている話者の意識と融合(結合)し、その結果、発話時基準で選択される。したがって、この現在形は発話時から見た現在時(現在時領域)に言及できる時制形式と言える。ここで、この現在形は原則的にシナリオの状況説明部分(ト書きも含む)にしか出てこないという点に注意されたい。シナリオの状況説明部分は、劇や映画を役者が演じたり読者(観客)が追体験したりする時に目にする場面なので、その意味では描写される状況は常に発話時(現在時領域)に当てはまっていると捉えることができる。すなわち、この部分はまさに眼前に当該場面が展開しているかのように役者や読者(観客)が体験する部分なのである。したがって、この眼前性を保障するために、状況視点が発話時におかれることになる。こういった特徴ゆえ、「知覚状況の時制解釈」原理(42)が発動し、例えば(45)の *enters* の出来事時は発話時(劇や映画のト書きを役者や読者が体験する時)を基準時とした同時関係を表すことになる。このメカニズムを図式化すると、

図28のようになる。

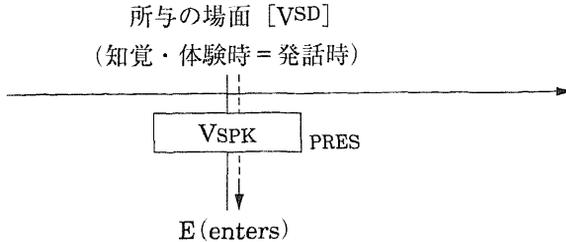


図28：「ト書き連鎖」における現在形の時制解釈

3.2.3. 「ト書き連鎖」に現れない（現れにくい）時制形式

ここまででは、「ト書き連鎖」に生じる日英語の時制形式の解釈のメカニズムを見てきた。最後に、3.2節を締めくくるにあたって、特定の時制形式が「ト書き連鎖」に生じることができないという事実も、われわれの時制構造の観点からは体系的に説明できることを見ていく。

坪本（2001）は、「ト書き連鎖」で用いられる日英語の時制形式は（46）に示される形式であると述べている。³¹（XPINGは現在分詞形，XPENは過去分詞形，XPsは現在形を表す。）

- (46) a. XPタ, XPテイル, XPル （日本語）
 b. XPING, XPEN, XPs （英語）

すなわち、日本語の「テイタ」形と英語の過去形だけが「ト書き連鎖」に生じないことになるが、これは前節で見たデータからも裏付けられる。

われわれの時制理論は、日本語の「テイタ」形と英語の過去形だけが「ト書き連鎖」に生じない（生じにくい）理由について、これらの形式がもつ時制構造と「ト書き連鎖」という言語環境の特性（「知覚の同時性」）とが矛盾するためであると主張することになる。これにより、上で見た坪本の観察に対して時制構造の側面からの動機付けを与えられる。まず、「テイタ」形から見ていく。

「タ」形は「先行関係」のままではこの環境に現れることはできないが、時間的接触関係を表すアスペクト的解釈を受ける場合のみ生起できることはすでに見た。一方の「テイタ」形は、「進行」・「状態継続」・「完了・結果」を表す

アスペクト・マーカの役割を果たす補助動詞「テイル」の「タ」形であるため、時制屈折辞-ta 自体が「完了・結果」のアスペクト的解釈を受けるのを阻止すると考えられる。「テイタ」が「進行」や「状態継続」を表す場合は基準時に先行する時点でのアスペクト的解釈になるので、-ta が基準時における「完了・結果」を表すのなら「テイル」形自体が表すアスペクト値（「進行」や「状態継続」は終着点（end-point）を含まないアスペクト値）と矛盾してしまうし、「テイタ」形が基準時における「完了・結果」を表す場合は、-ta 自体が「完了・結果」を表すと冗長的になるからである。したがって、「テイタ」形は原則として、基準時（状況視点がおかれる時点）から見た「過去における進行」・「過去における状態継続」・「過去における完了・結果」しか表せず、基準時における完了・結果などの時間的接触関係を表すことができない（図29を参照）。以上の観察から、「テイタ」形は「知覚状況の時制解釈」原理（42）に違反するので「ト書き連鎖」には生じない（生じにくい）と説明できる。

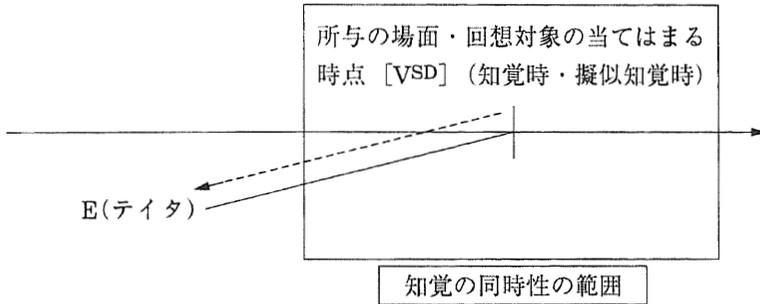


図29：「ト書き連鎖」における「テイタ」形

英語の過去形についても、その時制構造と「ト書き連鎖」のもつ「眼前性・現場性」という特性とが矛盾するから生じえないと説明できる。まず、「ト書き連鎖」の典型的用法の場合で、知覚時が発話時の場合から見てみよう。過去形の時制構造は「過去時区域の中に出来事時が生じる」であり（cf. 図2(ii)）、絶対時制形式は、デフォルトの場合、時制視点が発話時にある話者の意識と融合（結合）した結果、発話時基準で選ばれるのであった。したがって、下の図30が示すように、現在時領域（発話時を含む時間領域）に知覚時があり、そこにおかれる状況視点の眼前で過去形の動詞が表す状況が展開することはありえ

ない。ここでポイントとなるのが、絶対時制形式である過去形の場合、その時制構造内に時間区域（過去時区域）が存在するため、これの指す範囲を超えて出来事時が拡張することはないという点である。このために、「完了」や「結果」などの時間的接触関係を表すアスペクトの解釈は出来ないのである。それゆえ、原理（42）の違反となるので、この場合、過去形は許されないと説明できる。

次に、同じく典型的用法ではあるが、小説や物語の地の文で時制視点がナレーション時にあるナレーター（話者）の意識と融合（結合）した結果、ナレーション時基準で過去形が選ばれるが、過去形が表す状況自体は問題となる所与の場面（知覚時）と同時に当てはまる（眼前で展開する）場合を考えてみよう。この場合のメカニズムは、下の図31のように表される。この場合、状況視点の眼前に当該状況が当てはまるので原理（42）を満たし、一見、許されるように思える。しかしながら、もう1つの視点である話者の時制視点が問題となる所与の場面（知覚の同時性の範囲）内にはないため、現場性が保障されていない。³²ここで言う「現場性」とは、話者の視点がすべて所与の場面に入り込み、完全にその場の一部を構成している状態と考えているからである。それゆえ、この場合も過去形が許されないと説明できる。

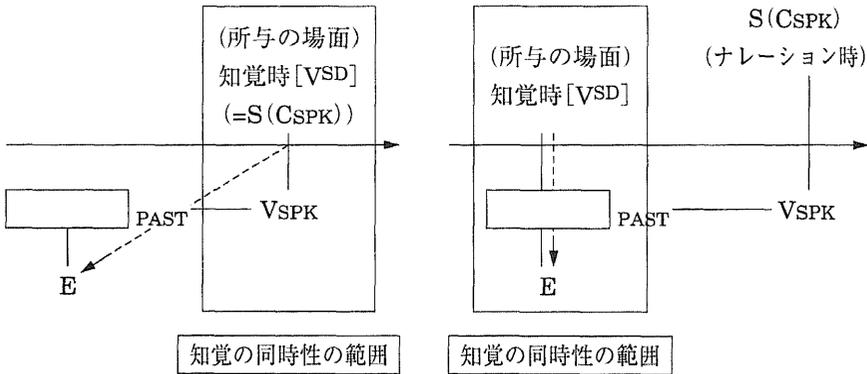


図30：「ト書き連鎖」における過去形
（知覚時が発話時にある場合）

図31：「ト書き連鎖」における過去形
（知覚時が過去時領域にある場合）

最後に、「ト書き連鎖」の認識・判断用法においても、過去形はその時制構

(47) では、イチローのバッティング・シーンという現場（場面）に話者の視点が入り込み、「ピッチャーがボールを投げる」という関係節状況をイチローの視点から描写するように捉えられている。一方、関係節状況を構成する「モノ」であるボールが主節述語である「打つ」の補語（目的語）という関係にもなっており、全体として「投げられたボールを打つ」という1つのまとまった事態を表していると捉えられる。この統合状況が可能なのは、「投げる」という状況の結果状態に焦点を当てることで、「打つ」という状況との接触を保障し、統合する解釈を可能にするメカニズムが働いているためと考えられる。

3.3.2. 主要部内在型関係節の時制解釈のメカニズム

以上を念頭において、この言語環境における時制解釈のメカニズムを見ていくことにする。主要部内在型関係節も現場参加型の状況描写を表すということは、話者の視点が当該場面に入り込んでいることを示唆するので、眼前性という概念が関わってくる。これをわれわれの時制解釈モデルの立場から言い換えると、話者の状況視点が設定された「現場（場面）」の中に入り込み、その状況視点から視線を時間軸に沿って関係節状況から主節状況へと流すことで、全体としては統合された1つの事態を描写するということになる。したがって、この言語環境でも「知覚の同時性」が関与し、「知覚状況の時制解釈」原理(42)が働くことになる。便宜上、(42)を下に再掲する。

- (42) 知覚状況の時制解釈原理：知覚対象となる状況を表す述語の出来事時は、状況視点のおかれる時点を基準時とした同時関係（時間的接触関係）を表さなければならない。

この環境では、関係節状況を見る話者の状況視点は主節述語の出来事時におかれている。すなわち、主節主語の視点がおかれている時点である。

それではまず、主要部内在型関係節内の述語が「タ」形の場合から見ていこう。

- (48) a. イチローは [ピッチャーがボールを投げたの] を打った。(=47)
 b. 陽子は [徹が出て行こうとしたの] を呼び止めた。
 c. 警官は [暴漢が殴りかかってきたの] を捕まえた。

具体例として、(48a)を考えてみよう。まず、「タ」形は相対時制形式であるので、状況視点のおかれる時点を基準にした先行性を表すことになる。しかしながら、この言語環境のもつ現場参加型という特性から原理(42)が発動することになるので、この「先行性」は時間的接触性を許す「完了・結果」のアスペクト（この場合は、行為の完結に焦点が当たっているので「完了」のアスペクト）へと解釈強制される。ここでは、話者は「イチローのバッティング・シーン」という場面に自らの状況視点を入れ込ませ、その状況視点をさらに主節述語の出来事時の上におき、そこから関係節状況に視線を向け、次に主節状況へと視線を移すのだが、関係節述語の出来事時自体は主節述語の出来事時よりも時間的に先行しているので「タ」形が用いられるのである（この前後関係は百科辞書の知識から明らかである）。ちなみに、主節の「タ」形についてであるが、この言語環境（口語体の独立節）の特性から通例発話時基準の時制解釈がなされるので、発話時よりも過去に生じた状況を指すのに「タ」形が使われていると言える。主要部内在型関係節内の「タ」形の時制解釈のメカニズムは、下の図32に示されるとおりである。ここでは、一旦関係節状況に向けられた視線が時間軸に沿って動くことを横向き破線矢印が表していることに注意されたい。なお、他の2例についても、基本的に同様の解釈が可能である。

次に、主要部内在型関係節の述語が「ル」形の場合を見てみる。具体例として、(49)をご覧いただきたい。

- (49) a. 警官が [ドロボーがおそいかかるの] を捕まえた。
 b. 陽子は [徹が出て行くの] を呼び止めた。
 c. 彼は [彼女が泣きじゃくるの] を慰めた。

(49a)を例にとって考えてみる。ここでも(48a)と同様のメカニズムが働き、当該場面（警官がドロボーを御用する場面）の中心となる主節述語・「捕まえた」の出来事時に状況視点がおかれ、主要部内在型関係節内の「ル」形はその時点から見た非先行性を表す時制形式と捉えられる。「ル」形・「おそいかかる」は非状態の状況なので、本来なら「ル」形の解釈原理(22a)が働いて後続関係を表すところであるが、この言語環境の特性から「知覚状況の時制解釈」原理(42)が働くので、基準時である主節述語の出来事時から見た同時性を表すように解釈強制される。ただし、語用論的には（たとえわずかでも）関係節状

況が先に起こり、続いて主節状況が関係節状況と同時並行的に時間軸上を推移することになるので、一部重複関係という解釈になる。すなわち、(49a)では、まず「ドロボーがおそいかかる」状況が生じ、その直後に「警官が捕まえる」状況が生じているが、両状況ともある時間帯は同時並行的に当てはまっているということになる。主要部内在型関係節内の「ル」形の時制解釈のメカニズムは、下の図33に示されるとおりである。(49b, c)の「ル」形も同様に解釈できる。

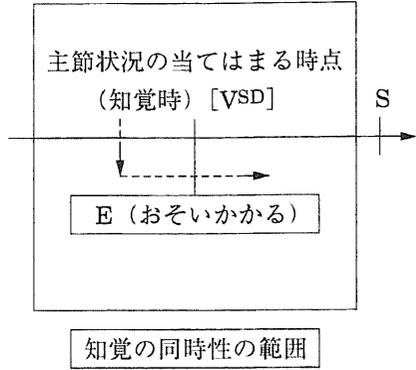
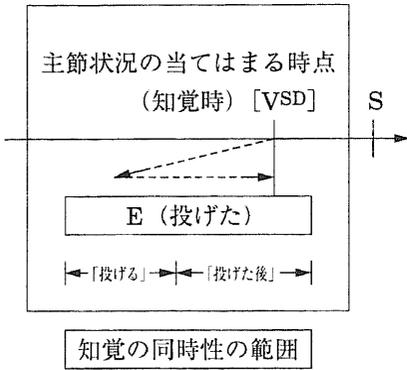


図32：主要部内在型関係節における「タ」形の時制解釈

図33：主要部内在型関係節における「ル」形の時制解釈

4. 結び

本稿では、Wada (2001) で提案された時制理論を基に日英語の時制現象を統一的に分析するための枠組みを提示し、日本語の述語は定形非定形に関わらず相対時制形式であるのに対し、英語の非定形動詞は相対時制形式であるが定形動詞は絶対時制形式であることを論証した。また、この時制構造レベルの時間情報が、各言語環境のもつ特性の影響を受けることで最終的な時制解釈値に至りつくことも併せて実証した。

本稿の妥当性を検証するための事例研究として、主に「内」の視点に関わる言語環境における日英語の時制現象を取り上げた。時制形式選択のための基準点と出来事時測定のための基準時が連動する相対時制形式はすべて、この「内」

の視点がおかれている時点基準にした時制解釈になるのに対し、時制形式選択の基準点が原則として発話時になる絶対時制形式は、その出来事時を測るための基準時のみが「内」の視点がおかれている時点となる。本稿で取り上げた知覚動詞補部・「ト書き連鎖」・主要部内在型関係節は、それぞれ独自の言語環境としての特性をもつ一方、「内」の視点を反映しているために共通して「知覚の同時性」という認知のあり方に関わる制約を受ける環境でもある。この制約を基にした「知覚状況の時制解釈」原理(42)と3つのタイプの言語環境の特性と日英語の時制形式の時制構造の情報をすべて考慮することが、それぞれの環境に生じる時制形式の時制解釈のメカニズムを体系的に捉える上で重要かつ必要であることが明らかになった。

注

- * 本稿は、2006年11月4日に東京大学（本郷キャンパス）にて開催された日本英語学会第24回大会ワークショップ『言語現象の「内」と「外」』（代表者：坪本篤朗）において、「「内」の視点・「外」の視点と時制現象」というタイトルで行った口頭発表の一部を加筆修正したものである。打ち合わせの段階で、坪本篤朗先生ならびに早瀬尚子氏には貴重なコメントをいただいた。発表当日は会場からも貴重な質問やコメントを頂いた。また、後日筑波大学大学院の授業において数回に渡って講義した際に、廣瀬幸生先生ならびに大学院生諸氏には有益なコメントをいただいた。記して感謝の意を表したい。なお、本稿は2007年度科学研究補助金（基盤研究（C））課題番号19520414「日英語ならびに西欧諸語における時制の比較研究」（研究代表者：和田尚明，研究分担者：渡邊淳也）および2007年度科学研究補助金（基盤研究（B））課題番号19320070「談話のタイプと文法の関係に関する日英語対照言語学的研究」（研究代表者：廣瀬幸生，研究分担者：加賀信広，島田雅晴，和田尚明）の補助を受けている研究成果の一部である。
- 1 英語の規則変化動詞だと、現在形の場合は3人称単数のときのみ屈折辞が明示的になるのに対し、過去形の場合は人称・数に関係なく屈折辞は-(e)dとなる。しかし、be動詞だと、現在形の場合でも人称・数に応じた時制屈折辞が顕在化するし、過去形の場合はさらに法に関しても異なる時制屈折辞が顕在化する（例：I wish I were a bird.における仮定法のwere）。したがって、本稿では顕在化していない場合も人称・数に呼応した時制屈折辞、すなわち、ゼロ形態素が存在するとみなすことにする。
 - 2 ここでは便宜上、語幹部分と時制形態素部分とが分離しやすい場合を考察しているが、両者が融合してしまっている場合も同様に考えることができる。なぜなら、時制構造では絶対時制部門と相対時制部門に分かれるが、形態・統語レベルでは2つの時制部門に入ることになる要素が完全に融合してしまっている

と考えることができるからである。したがって、went は時制構造では、絶対時制部門に入る-ed と相対時制部門に入る go に因数分解される。本稿では、日英語や定形非定形を問わずに、この考え方を採用している。

- 3 このことは、日本語の動詞（述語）が「ムード」もしくは「モダリティ」という意味範疇を表わせないと言っているのではない。例えば、(i) が示すように、いわゆる過去形にはムードを表す意味機能がある。

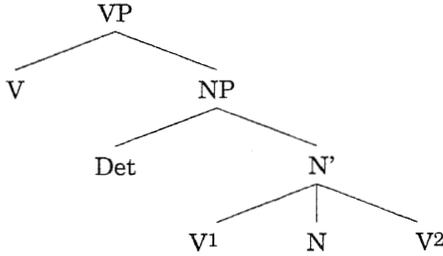
(i) a. あ、あった。

b. あの時、君が連絡くれていたらなあ。

ここで問題にしているのは、時制形式自体に直説法や仮定法などに応じた屈折変化があるわけではないという点である。したがって、この点においては、日本語には西欧言語のように文法体系に組み込まれた文法範疇としての法は存在しないと言える。余談ながら、(i) に示されたムードの「タ」も、本稿の立場では「タ」形のもつ時制構造は保持しているということになるが、この考え方は井上 (2001) や定延 (2004) のそれと基本的に同じである。

- 4 日本語の述語には定形と非定形の区別はないと主張する学者もいる（例えば、寺村 1984）。その場合でも、日本語の述語はすべて相対時制形式であると本稿では主張しているので、議論に本質的な影響は与えない。
- 5 本稿の言う「話者の時制視点」は、Janssen (1996) の言う“viewpoint”, 三原 (1992) の言う「視点 (tense perspective)」に匹敵する概念である。
- 6 このことは、本稿の依拠する時制理論では、英語には「未来時区域」は存在しないということを示唆している。すなわち、will (shall) は「未来時区域」を表す時制形態素ではなく助動詞と考え (Eng 1996, Huddleston 1995, Klinge 2005), さらに助動詞・本動詞説に立って play や know などと同じ本動詞の一種と考える (Ross 1969, Huddleston 1974, 中右 1994)。したがって、will 自体は現在形で過去形 would とペアを成し (すなわち、定形動詞と考える), その絶対時制部門は現在形なら-s, 過去形なら-ed が関与する。しかしながら、この主張は、will を含む文は未来時に言及できないと言っているのではない。2.2.3 節でも見るように、will に続く非定形 (原形) 部分はその役割を果たしているのである。更なる詳細については、Wada (2001) を参照されたい。
- 7 2.2.1 節で見たように、われわれの枠組みでは英語の R-形態素として、現在分詞の-ing・過去分詞の-en・原形不定詞の ϕ 以外に動名詞の-ing と to-不定詞の to-を認める (Wada 2001; 和田 2006b)。動名詞の時制構造は「無指定」、すなわち、潜在的に3つの時間関係をすべて表せると考える。to-不定詞の場合、to-がもともとつ経路の意味が反映していると考えられることから、その時制構造は「後続性」を表すと考える。動名詞や to-不定詞の時制構造に関してこのように考える根拠については、主に Duffley (1992, 2000) に負うところが大きい。
- 8 過去分詞のもつ時制構造が「先行性」であることに関しては、和田 (2006c) が本稿と同じ枠組みでかなり包括的に論証している。また、現在分詞のもつ時制構造が「同時性」であることに関しては、認知言語学の枠組みで早瀬 (2002) が、現在分詞は基本的に同時性を表し、一見同時性を表さないように見える場合もその延長線上で説明できるという趣旨の主張を行っている。本稿も、基本的にこの立場を支持することになる。

- 9 原形不定詞の時制構造ならびに時制解釈についての詳細は、Wada (2001) を参照されたい。
- 10 話者の時制視点と意識が融合（結合）しない有標の場合としては、英語の場合、いわゆる歴史的現在（例：Germany invades Poland in 1939.）や伝達部が未来時に言及する間接話法補部における時制形式選択（例：John will say that Mary {is / was} sick.）などが挙げられる。
- 11 「話者の意識」は Lakoff (1996) や Lakoff & Johnson (1999) の“Subject”，廣瀬の一連の研究（Hirose 1995, 2000, 2002；廣瀬 1997）における「私的自己」や「公的自己」の中核（意識主体）に対応する。
- 12 この能力は、Langacker (1993) の言う「参照点 (reference point)」を作り出す認知能力に当たる。
- 13 動詞（述語）の表す状況を眺める（捉える）ための視点として、他に「空間上の視点」、感情移入 (empathy) などの場合に関与する「心理的に同化した人物の視点」(cf. Kuno & Kaburaki 1977) および主観性 (subjectivity) の問題に関わる「認識論的視点 (epistemological perspective)」(cf. Iwasaki 1993) などがあるが、本稿では「時間軸上の視点」に限って議論を進める。その際、空間の問題や感情移入の問題などが重なってくる場合も考えられるが、本稿ではあくまでも時間軸上の問題を中心に扱っている。
- 14 間接話法補部は元話者の観点をベースにしながらも伝達話者の観点が関わる言語環境なので、元話者の意図していた伝達内容を損なわない限りにおいて、伝達話者の観点到った「加工」は許される。したがって、伝達話者の状況視点を発話時（伝達時）においたままで発話時を基準時とした解釈も可能である (cf. 和田 2002)。なぜならば、当該状況の出来事時と元発話時や伝達時との時間関係ならびにアスペクト値は変わらないからである。伝達時基準の解釈の場合、問題となる補文動詞 was の出来事時の時間値は「先行性」となり、当該出来事時と元発話時の同時関係は別の要因によってもたらされる情報ということになる。なお、この場合の時制解釈は直示的解釈の一例である。
- 15 和田 (2006c : 95) は、主節動詞と非定形動詞の間に S 節点や NP 節点がある場合、それらの節点が当該非定形動詞の時制解釈に関して障壁になるので、この名詞修飾位置という言語環境は主節動詞からは非束縛環境となり、その結果、主節動詞の出来事時を基準時とする非直示的解釈も発話時を基準時とする直示的解釈も可能であると述べている。本稿でも、この考え方を採用する。以下の統語構造において、主節動詞は V の位置に、非定形動詞は V¹ か V² の位置に生じるので、間に NP 節点が入ることから、名詞修飾位置は時制解釈に関して非束縛環境であり、この位置に生じる非定形動詞の時制解釈は、必ずしも主節動詞の出来事時を基準時とする必要がないということになる。なお、以下の図の NP は目的語位置にあるが、主語位置に生じる場合も論点は同じである。



- 16 この線に沿った過去分詞形の包括的な時制解釈メカニズムの分析については、和田 (2006c) を参照されたい。
- 17 非定形動詞の種類によっては、特定の言語環境には現れることが出来ない場合もある。例えば、(英語の) 原形不定詞は名詞修飾位置には生じることが出来ない。
- 18 原理 (22) は基本的にどのような言語環境においても当てはまるが、特定の要因によって覆されることもある。例えば、下の (i) に示されているように、特定の未来時を指す副詞と共起した場合、状態述語であっても基準時との後続関係を表す。
- (i) (この分だと) 和也は明日病気だ。
- 19 アスペク的な値が前面に出てくる解釈が可能なのは、相対時制形式の特徴である。したがって、3節でも見るように、英語の非定形動詞も基本的にはアスペク的な値の解釈になることは可能である。
- 20 Nakau (1976) や中右 (1980) は、この「収斂する時点」のことを「収束点 (Convergence Point)」と呼んでいる。
- 21 この「ノ」と「トコロ」は知覚動詞補部を導く専用のマーカーということではないし、また両者はいつも交換可能というわけでもない。「トコロ」は、本をただせば、「一定の空間的広がり」を表す名詞だったものが助動詞化したものである (寺村 1984 : 210)。したがって、本文でも取り上げる「知覚の同時性」に関する制約によって主節 (知覚) 動詞の表す時点との同時性を表すことになる知覚動詞補部を導くマーカーとしては、その制約を満たしている分にはどのような時制形式とも共起可能である。下の (id) で「タ」形と「トコロ」の共起が許されるのは、「結果」のアスペク的な解釈の場合は2つの事態の時間的接触を許すので、「知覚の同時性」を満たすことになるからである。下の (ib) で「テイタ」形と「トコロ」の共起が許されないのは、3.2.3節で述べられているように、「テイタ」の場合は「結果」のアスペク的な解釈ができないからである。
- ((ib) の「トコロ」でマークされた文の非文性は、Google 検索で一例もヒットしなかったことから裏付けられる。)
- 一方、「ノ」は「五感によって直接体験される具体的な動作・状態・出来事」を表すという特性ならびに「2つの事態の時間的接触」という特性をもつので (坪本 2001 : 52; cf. Kuno 1973), 基本的には基準時との同時性を表す時制形式と共起する。また、アスペク的な解釈を受けて時間的接触性が保証されれば、

容認可能である (cf. (id) の「タ」形)。しかしながら、「ノ」は「間接的体験や認識」を表す拡張的な解釈を受けることも可能であり、その場合に時間的先行関係を表す「タ」形とも共起できると思われる (cf. (ib) の「テイタ」形)。

- (i) a. 徹は陽子が泣いている |の/ところ| を見た。
- b. 徹は陽子が泣いていた |の/*ところ| を見た。
- c. 徹は陽子が泣く |の/ところ| を見た。
- d. 徹は陽子が泣いた |の/ところ| を見た。

22 他の種類の知覚動詞の例も含めて、実例をいくつか挙げておく。

- (i) a. He walked up toward the front door but then stopped as he noticed several people sitting in the living room.
(C. Webb, *The Graduate*, p.29)
- b. He stood staring down at the blue light rising up through the water for several moments before hearing the door open and bang shut behind him and someone walk across to where he was standing.
(C. Webb, *The Graduate*, p.10)
- c. He turned over and was just about asleep again when he heard somebody's throat being cleared in the room.
(C. Webb, *The Graduate*, pp.147-148)
- d. Benjamin watched her walk on down the sidewalk and out of sight.
(C. Webb, *The Graduate*, p.150)
- (ii) a. 立ちどまったまま、彼は写真をのせた板がかかるく左右に揺れ、彼女の母の葬列が丘を上って行くのを見ていた。
(山川方夫『夏の葬列』 p. 14)
- b. 赤電話でソバ屋のダイヤルを廻し終えて、彼はふと私設球場の金網に片手をかけ、背を向けて、その若い女が立っているのを見たのだった。
(山川方夫『待っている女』 p. 18)
- c. 静まりかえった建物には誰の姿も見えず、時計のチャイムが遠くで鳴るのが聞こえた。
(遠藤周作『深い河』 p. 61)

23 英語の知覚動詞の(統語的)補部すべてに小節対応の節点を与えることは出来ないとする分析もあるが、この補部全体がいわゆる時制文対応の節点もしくはNP節点をもつのでなければ、本稿の議論には影響しない。

24 和田(2006c)は、このような言語環境を時制現象に関する束縛環境と呼んでいる。

25 本稿で言うところの解釈強制は、認知言語学的分析でよく用いられる「強制 (coercion)」と基本的には同じ概念である。

26 この言語環境は、和田(2002)では「解釈パターンC」、和田(2006a)では「解釈環境C」と呼ばれている。

27 意味的補部は必ずしも知覚動詞(述語)を含む文の直後から始まる必要はない。これは英語の場合でも同じことである。

28 ここで言う「構文」とは、いわゆる構文文法学派(例えば、Goldberg 1995やCroft 2001)が用いる意味での「構文」である。

29 面白いことに、(37a)の日本語では「ト書き連鎖」になっている部分が、(i)が

示すように、その英語訳ではふつうの過去形による状況描写文になっているところがある。

- (i) A row of laurel fig trees planted along one side of the white, dry road shuttled past the window of the taxi. The vehicle kicked up dust. Fields of wheat beyond the line of trees....

(S. Endo, *Deep River*, p.159)

このことは、坪本の一連の研究でも指摘されていることだが、英語のほうが日本語に比べて「ト書き連鎖」が現れにくいことを示唆している。この違いには、坪本(2002a:58)が言うように、「主体の優位性に関する日英語の違いと日本語には英語よりもより強く《状況参加型》の傾向がある」という点が関与していると思われる。

- 30 ここでの「玉ねぎ (his Onion)」はイエス・キリストを指している。
 31 坪本(2001:131)は、XP_{ティタ}は単独のXP-NP連鎖では用いられないと述べている。本稿で扱う「ト書き連鎖」はXP-NP (NP-XP)連鎖が単独で用いられるものなので、XP_{ティタ}は「ト書き連鎖」に生じない形式であると考ええる。
 32 知覚動詞の意味的補部では、この現場性(臨場感)が必須概念ではなく、むしろナレーション時におけるナレーターの見点の関与の度合いが高くなる環境であるため、過去形が許されるのである。これが、「ト書き連鎖」との言語環境的な違いの1つでもある。
 33 主要部内在型関係節と「ト書き連鎖」はともに「現場性」を表し、「目」の前の状況を表すという点では共通しているが、坪本の用語を借りれば、「ト書き連鎖」は「モノ形式の中にコトを読み取る構文」であるのに対し、主要部内在型関係節は「コト形式の中にモノを読み取る構文」であるという点で異なる。
 34 本稿で言うところの主要部内在型関係節は、坪本(2001)では「ノ」節として言及されている。そこでは、この「ノ」節はプロトタイプ現象を示すことが論じられ、様々なタイプの「ノ」節が包括的・体系的に分析されている。本稿が扱うのは、その典型的な用例のみである。
 35 主要部内在型関係節は通例ラでマークされるが、(i)に見られるように、似たような構文連鎖として、ガでマークされる場合もある。

- (i) a. [あのとき記者が一人車からおりてきたの]が電話したに違いない。
 b. [雨が激しかったの]がおさまった。

(坪本 2002b:29)

ただし、この場合は1つの事態の連続・継起関係や状況の推移(変化)を表しているのであって、2つの事態が統合されているのではない。

参考文献

- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*, Cambridge University Press, Cambridge.
 Comrie, Bernard (1985) *Tense*, Cambridge University Press, Cambridge.
 Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*, Oxford University Press, Oxford.
 Duffley, Patrick (1992) *The English Infinitive*, Longman, London.

- Duffley, Patrick (2000) "Gerund versus Infinitive as Complements of Transitive Verbs in English," *Journal of English Linguistics* 28, 221-248.
- Enç, Mürvet (1996) "Tense and Modality," *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*, ed. by Shalom Lappin, 345-358, Blackwell, Oxford.
- Goldberg, Adel E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, The University of Chicago Press, Chicago.
- 早瀬尚子 (2002) 『英語構文のカテゴリー形成』勁草書房。
- Hirose, Yukio (1995) "Direct and Indirect Speech as Quotations of Public and Private Expression," *Lingua* 95, 223-238.
- 廣瀬幸生 (1997) 「人を表すことばと照応」中右実(編)『指示と照応と否定』: 5-89. 研究社。
- Hirose, Yukio (2000) "Public and Private Self as Two Aspects of the Speaker: A Contrastive Study of Japanese and English," *Journal of Pragmatics* 32, 1623-1656.
- Hirose, Yukio (2002) "Viewpoint and the Nature of the Japanese Reflexive *Zibun*," *Cognitive Linguistics* 13, 357-401.
- Huddleston, Rodney (1974) "Further Remarks on the Analysis of Auxiliaries as Main Verbs," *Foundations of Language* 11, 215-229.
- Huddleston, Rodney (1995) "The Case against a Future Tense in English," *Studies in Language* 19, 399-446.
- 井上優 (2001) 「現代日本語の「タ」——主文末の「…タ」の意味について」つくば言語文化フォーラム(編)『「た」の言語学』: 97-163. ひつじ書房。
- Iwasaki, Shoichi (1993) *Subjectivity in Grammar and Discourse: Theoretical Considerations and a Case Study of Japanese Spoken Discourse*, John Benjamins, Philadelphia.
- Janssen, Theo (1996) "Tense in Reported Speech and Its Frame of Reference," *Reported Speech*, ed. by Theo A. J. M. Janssen and Wim van der Wurff, 237-259, John Benjamins, Amsterdam.
- Kirsner, Robert and Sandra Thompson (1976) "The Role of Pragmatic Inference in Semantics: A Study of Sensory Verb Complements in English," *Glossa* 10, 200-240.
- Klinge, Alex (2005) "Where There Is a Will, There Is a Modal," *Modality: Studies in Form and Function*, ed. by Alex Klinge and Henrik Høeg Müller, 169-186, Equinox, London and Oakville.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Kuno, Susumu and Etsuko Kaburaki (1977) "Empathy and Syntax," *Linguistic Inquiry* 8, 627-672.
- Lakoff, George (1996) "Sorry, I'm Not Myself Today: The Metaphor System for Conceptualizing the Self." *Spaces, Worlds, and Grammar*, ed. by Gilles Fauconnier and Eve Sweetser, 91-123, The University of Chicago Press, Chicago and London.

- Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*, Basic Books, New York.
- Langacker, Ronald (1993) "Reference-Point Constructions," *Cognitive Linguistics* 4, 1-38.
- Maas, Utz (2004) "'Finite' and 'Non-finite' from a Typological Perspective," *Linguistics* 42, 359-385.
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語構造』くろしお出版。
- 中村ちどり (2001) 『日本語の時間表現』くろしお出版。
- Nakau, Minoru (1976) "Tense, Aspect, and Modality," *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, ed. by Masayoshi Shibatani, 421-482, Academic Press, New York.
- 中右 実 (1980) 「テンス, アスペクトの比較」國廣哲弥 (編) 『日英語比較講座第2巻: 文法』: 101-155. 大修館書店。
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店。
- Ross, John Robert (1969) "Auxiliaries as Main Verbs," *Studies in Philosophical Linguistics*, ed. by William Todd, 77-102, Evanston, Illinois.
- 定延利之 (2004) 「ムードの「た」の過去性」『国際文化研究』21, 1-68.
- Smith, Carlota and Mary S. Erbaugh (2005) "Temporal Interpretation in Mandarin Chinese," *Linguistics* 43, 713-756.
- 高橋 潔 (1999) 「知覚動詞と非定形補文との意味的整合性」稲田俊明, 他 (編) 『言語研究の潮流』: 127-144, 開拓社。
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。
- 坪本篤朗 (1995) 「場面の認知論—「ト書」連鎖の日英語比較—」『英語青年』140. 12, 617-619, 640.
- 坪本篤朗 (1998) 「文連結の形と意味と語用論」中右実 (編) 『モダリティと発話行為』: 100-193. 研究社。
- 坪本篤朗 (1999) 「モノとコトから見た文法—主要部内在型関係節とト書き連鎖—」『日本語学』18. 1, 26-40.
- 坪本篤朗 (2001) 『モノとコトから見た文法—文法と意味の接点—』筑波大学学位論文。
- 坪本篤朗 (2002a) 「モノとコトから見た日英語比較」『国際関係・比較文化研究』1巻1号, 57-78.
- 坪本篤朗 (2002b) 「再び, 主要部内在型関係節構文—「分離」と「結合」の間—」『ことばと文化』6号, 27-44.
- Wada, Naoaki (2001) *Interpreting English Tenses: A Compositional Approach*, Kaitakusha, Tokyo.
- 和田尚明 (2001) 「英語の完了形・日本語の完了形相当表現の時間構造と定時点副詞類との共起性」『言語研究』119号, 77-110.
- 和田尚明 (2002) 「時制現象から見た日英語比較—間接話法と物語文を中心に—」『茨城大学人文学部紀要 (コミュニケーション学科論集)』12号, 11-34.
- 和田尚明 (2006a) 「英語の3人称小説における時制解釈」『時制とその周辺領域の統語的・意味的研究 (平成15年度~17年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)))

研究成果報告書 課題番号15520311)』, 89-134.

和田尚明 (2006b) 「定形動詞補部に生じる非定形動詞の時制解釈」 卯城祐司, 他 (編) 『言葉の絆』 : 397-410.

和田尚明 (2006c) 「過去分詞形の時制解釈のメカニズム」 『文藝言語研究 (言語篇)』 50号, 85-128.